川柳の雑誌

麻吉路郎☆玄宰

昭和十七年四月一日発行

四月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

ニキビ・吹出物に是非此藥

りとびきに

美顏水

蚤・蚊・南京虫等の毒虫てカユいい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ゼヒお勸したい藥です！

東京・大阪

桃谷順天館

雑感

麻生路郎

感激

★感激にも大小があり、深淺がある。假令へば、同じ死であつても親の死と子どもの死とでは感傷のデグリーが違ふ。ところが、九勇士のハワイ眞珠灣に於ける壯行が發表された時の感激ばかりは、その幅に於て、その深さに於て全くその比を見ないものであつた。

★九勇士の九人中の八人までが、生を西日本に享けてゐることも大いに考えさせられた。

★九勇士は軍の神樣であると共に平和を尤も希求し、招來する神樣ででもあると思つた。

謹んで英靈に一句を捧げる。

九勇士ああ平和への切札か

○

急診

不朽洞會員小林橙舍博士が、急診の途、電車事故に斃れた。自家用車の運轉手も卽死した。患者も手遲れとなつて不歸の客となつた。橙舍博士の場合、軍人の戰死にも比すべき職域奉公の極致かも知れないが、運轉手の注意力に遺憾な點があつたのではないかと思うと、諦めきれないものを持つ。しかし運轉手も急診の犧牲と云へば云へないこともない。僅に一秒の差が急患の一命をとりとめたかも知れないのに、頼るべき綱の方がさきに切れてしまつたことは患者にとつてもいたましい出來事であつた。私は宿命說を全然否定し得ないことを悲しむ。橙舍に

轉落の石の姿で無常來る

といふ句があることをここに記しておく。

哀れ村人のいのちあづかる身なりしを

（橙舍を悼む）

○

入試

昨年、農學校の入試にすべつた三男が今年は河岸を變へて商業をうけて首尾よくパスした。何故すべつたのか、何故パスしたのか、誰も知らないのだ。商業へ行くべきものが入口を間違へて農業へ行つたことを天が敎へて與れたのかも知れない。

○

戰線

戰線にある未知の柳人から投句と共に次のやうな通信を手にした。

今、我々ハ南方ニ於テ東亞共榮圈建設ノ一員トシテ軍務ニ精勵シテ居リマス。移動ノ途上、道邊ニアル冊子ヲ手ニ取ルト「川柳雜誌」ソレヲ動機トシテ班內ニ起ツタ川柳熱、ツイニ「戰柳會」ヲ作ル

戰柳會員　露本　笑里

昭和十七年○月○○日

戰線で川柳を樂しむこと、全く生死を忘れた觀がある。ホントの餘裕綽々とは斯うした心境か。

大東亞築く力だこの一票

大政翼贊會
大阪府

川柳雜誌　四月號目次

表紙……泰の古典舞踊（男）……

雜感……麻生　路郎……（一）

川柳寫眞（放牧）撮影　福井哲・句　諸家……（三）

武玉川四篇研究（二九）……梅本　蜂子　森　東魚　塵山　省二……（三）

隨想・丹波の狐……小山　文三……（二四）

吟行地調べ　大和篇（二）……麻生　路郎……（二）

橙舍逝く……（二六）

川柳漫畫　漫筆は動く……小畑自有浪……（二〇）

春宵雜談……廣野・豆林……（二二）

初等川柳講座（三）……麻生　路郎……（二八）

川柳にうまを拾ふ……鈴木　石鹿……（二六）

川柳世界史（一二）……戶田　孤峯……（二〇）

火龍南に進む（詩）……山本耕一路……（二四）

★

近作柳樽……麻生路郎選……（二四）

川柳塔……麻生路郎選……（二四）

同舟近詠……諸家……（一九）

一路一劍道……池田　可宵選……（二九）

隼同窓……寺井　銳々選……（二九）

各地柳壇……（二二）

川協・柳界展望……（二八）　七號室雜記……（二〇）

社關係の人々……（二六）

川柳書架（八二）……（二二）　飛鳥往來……（二四）

吟行地調べ 大和篇（二）

麻生路郎

★謹詠二句。

ぬかづけば御一代の御風蹟　路郎

臣は臣神代の昔昔より　同

（二）畝傍山東北陵

★人皇第一代神武天皇を葬り奉つた畝傍山東北陵は高市郡畝傍町大字洞字ミサンザイにあつて關急電車神武御陵前停留所を下車、西北七五〇米のところにある。陵域は周圍四百七十間、田圃の平地にあつて南向き、二重壕を繞らし壯大森嚴である。

★御陵は久しく荒廢して、所在さへ不明であつたが、幕末に戸田大和守忠至が山陵奉行として諸種考證の結果、現地を御陵地として確定するにいたつたのである。

★明治天皇は明治十年二月十一日特に本陵に御親謁遊ばされ、國家の大事は御報告御親謁遊ばされることとなつた。

★日本書紀によると、神武天皇は即位七十六年三月十一日、寶算百二十七歳で崩御遊ばされ、翌年九月十二日に畝傍山東北陵に葬し奉つたのである。

▼前號、山雨樓氏の句に百二十七歳とあるのは百三十七歳の誤植であるから、ここで訂正しておく。橿原宮司の書には古事記によつて百三十七歳とされてゐるので日本書紀とは十歳の差があるのである。

（三）大和三山

★大和平野の南部、所謂飛鳥地方に近く鼎立してゐる畝傍山、天香久山、耳成山を大和三山と呼んでゐる。橿原神宮の北背後にある山容雄壯なのが畝傍山で、東へ二十町餘りのところにあるこんもりとしたのが天香久山、更に東北一里ばかりのところに山容のゆるやかなのが耳成山で三山とも古來からの名所で天香久山は天照大神の岩戸籠りされたところだと記されてゐる。

★畝傍山と耳成山とは塊狀火山に屬してゐる。萬葉集には

香久山は畝火を愛しと耳梨と相爭ひき、神代よりかくなるらし、いにしへも然なれこそ、現身も妻を爭ふらしき

とあつて、畝傍山を（一九〇米）女性とし或は男性としてゐるが、山形から畝傍を女性と見る人が多い。

★耳成山（一三八米）は天神山とも呼ばれ、又山中に梶が多いので、くちなし山とも云はれてゐる。その南方に藤原京が營まれてゐた。推古天皇がこゝに行幸され離宮をお立てになつたそうである。試みに山に登つて地を踏むと一種の響があつて、中は虛かと思はれると云ふやうなことが古書に出てゐるが今はどうだか知らない。

★天香久山（一四七米）は天香具山、香天加久山などと記され、高天原にあつた山とされてゐる。畝傍山の東方にあつて周圍には古墳が多い。持統天皇の「春すぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香久山」の御製であまりに有名である。土地の人はこの山をアマのカグ山と呼んでゐる。神代から名高い山で伊豫の天山とともに天から降つたのだと云はれてゐる。又神武天皇が椎根津彦と弟猾を遣してこの山から埴土を採り八十平瓮嚴瓮をお造りになり諸神を祀られたと云はれ、古くから信仰の山となつてゐる。埴安池なども、この山麓にあつたらしいが今は明らかでない。

★大和三山を詠む。

見下ろせば大和三山跨げさう　馥乃

大和三山ねたむ姿は更になし　同

（四）久米寺

★久米寺は橿原神宮驛の西口の近くにある。久米とは神武天皇の近衛兵であつた久米部の住んでゐた所の名である。寺の正しい名は眞言宗の靈禪山東塔院である。聖德太子の弟、來目皇子が推古天皇の二年に創建されたのである

★養老二年に善無畏三藏が來朝して、この寺に住んだ時南天竺の鐵塔に模して高さ八丈の大多寶塔を建立し、心柱の下に佛舍利三粒と大日經七軸とを納めたそうである。弘法大師が、此の寺で修學中、この經を讀んで發奮し、つひ

ねつとせきには
美味改源
お茶でのむと　よくキキます
ねつにも改源　せきにも改源
好評　よい味　よい香……
（各地藥局藥店に有）
專賣元　株式會社　中西武商店
大阪市道修町三
東京市室町二
價　藥
.30　.50　1.00

に渡唐して眞言の秘法を會得するに至つたのだといふ挿話がある。

★本堂と觀音堂は萬治年間の再建である。金堂（本尊藥師如來）、正面にに練塔、東に觀音堂（十一面觀音と久米仙人の半像安置）、地藏堂、西に鐘樓、多寶塔があり、金堂の背後には弘法大師の益田池の碑の模造がある。境内の中央にある石塔婆は善無畏の造立で創建當時のものだとされてゐる。

★又、この寺にからんで久米仙人の物語がある。久米仙人は大和の人で深山に入つて仙法を學び、神通力を得て大空を自由自在に飛行することが出來るやうになつた。

ある時、故里の空を飛翔してゐると、あたりの小川で浣衣を踏んでゐた女の白い脛を見て俗心を生じ、途端に神通力を失つて墜落したが、發心してこの地に伽藍を建立したのが久米寺であるといふのである。又、女が芋を洗つてゐたのだといふ説もあつて、現在久米寺の東方に、芋洗川といふ小川があるが、私は浣衣を踏んでゐたといふ説が妥當でもあり、興趣も深いと思ふ。

★詰まり久米寺の創建は來目皇子説と久米仙人説と二つある譯であるが緣起では草創は來目皇子で仙人は中興といふことになつてゐる。

★又飛鳥の北、香久山の南に奥山といふところがあつてそこに久米寺阯がある。俗に久米寺の奥の院と稱されてゐるが、これが推古朝に創建された久米寺であつて、今の久米寺やその西にある寺阯の方は弘法大師や久米仙人の傳説に關係のある寺のやうに思はれるが、ハツキリしたことは判らない。

★次に久米仙人を詠んだ古川柳をあげて見やう。

その昔洗濯の場へ人がふり
久米仙はよほど遠目の利く男
仙人も丸木橋ふむ白いはだ
仙人を生捕にするせんだくし
仙人をしろうとにする美しさ
たなびく雲の絶え間より久米
どさり
仙人さまアと濡手で抱き起し
久米がすこたん聞いたかと仙
仲間
馬鹿仙人だと空雲かへるなり
仙人も故郷を忘じがたく落ち

六句目の「たなびく雲の絶え間より」は百人一首の文句取りの句である。

★久米寺の本堂の傍らに、ペンキ塗りの次のやうな掲示がある。

久米大仙人尊者

久米仙人ハ今去一千四百餘年欽明天皇ノ御代金剛山ノ麓葛城ノ里ニ生レ吉野山ノ奥龍門ケ嶽ニ木食シテ神通飛行ノ術修得空中ヲ飛行中偶々當寺ノ境内ニ方十六丁四邊ニ白キ八重ノ萩ノ花今盛リト咲キ恰モ華ノ淨土ノ如ク美麗ナリケレバ仙人之ヲ賞觀ノ餘リ當寺ニ（二百餘歲）寄住ス聖武天皇奈良大佛殿御建立ニ際シテ勅令シテ建築奉行トナス仙人神變不可思議ノ仙術ヲ以テ大佛殿ノ巨石巨木ヲ集メ竣工速ニ成就セシメ給ヘバ天皇深ク御嘉賞アリテ功ニ依リ免田三十町歩ヲ賜フ仙人衆生ノ救濟ノタメニ中風除ケノ箸ヲ遺シ自作ノ像ヲ造リ毛髮ト生齒ヲ植ヘ肉附ノ自像ヲ當寺ニ留メ昇天ス尊像今本堂内ニ安置セリ

この掲示で見ると久米仙が俗心を生じて墜落した原因の女の白い脛が、白い萩の花になつてゐるが、これは女の白い脛でなくては俗心を生じたといふ理由としてピンとこない斯うした俗つぽい傳説で有名になつた此の寺を一層俗にしたものは次の掲示である。

授　與

中風除御祈禱署　開運御守
頭痛除御守　子供虫除守
出世福壽守　安産帶直御守
眼病平癒御守　武運長久御守

久米寺

外に、婦人良藥久米仙人湯當山授與といふ廣告も出してある。中將湯からおつりを取りそうである。

★久米寺を詠む。

久米寺の土産は祖父と子に與　乃
へ　同
迷ひまだ曇あず萩咲く中に立　同
ち
魔性とはうべなるかなと久米　同
嘆ぶ

放牧

——阿蘇の草千里——

火をはらむ山ともみへず馬の群　上田翠光

若駒の聞耳立てた阿蘇の鳴り　梶本文雄

草千里雪解の水に行當り　正本水客

馬の糞こゝは絶景とは知らず　須崎豆秋

大陸の月にも馴れん草千里　戸田孤篷

撮影　福井哲

川柳塔

＝路郎選＝

煙立ち立つ難波の街であつた筈
堺　麻生葭乃

絢爛の花屋見かへる人もなし
猫今日もお粥のしづくだけ貰ひ
飼猫の盗癖ゆるす氣にもなり
われ充てり充てりと村の菜種咲く
第一便二便もバナナ喰ふ便り
南進日本さても墳墓の地の多き

小林樗舎先生を悼む

冥府まで屆くテープのあらばこそ
芦屋　寺井鋭々

衣料切符着るに困らぬのが困り
生活戰線異狀なし定期券を繼ぐ
箱植ゑの葱自轉車の埃浴び
病後もう歩いて見たい柳の芽
夕靄の中に列あり盛りめし屋
大阪府高石町　戸田孤篷

點（五句）

書いたもの證據零點なども出來
答案にみせる小さい御追從
採點をする算盤の音がする
死んだ生徒の點ものつてる閻魔帳
甲乙丙丁ボツボツボツと押されたり
男雛理窟の云へる顏でなし
殺される農奴の前を蟻がゆく

卒業式

もう一ぺん仇名で呼んで頂戴な
尼崎　水谷鮎美

モンペイのポンプのように乳が出る
麥青し空は群青にて應へ

恩賀紀川氏愛息を悼む

極樂を信じる父となる日なり
大阪　橋本綠雨

大江橋

年頃に待ち人が來ぬ顏になり
ジャバ島首都三月五日

バタビヤも頼み甲斐ない内に落ち
草の名も知らず喰ふこと教へられ
買物のことで辭めますタイピスト
白菜が四分の一の今日の列
春雨にぬれて夜勤が戻る也
大阪　高橋かほる

待ち合せ帽子の型を折り直し
春雨に青さの續く竹梯子
太刀魚の長さへ水を二回掛け
三階の窓から散つた請求書
切符制歸ると乳兒起きてゐる
夫婦共足袋が破れてゐて四月
三日間競馬が續く人通り

長男榮三郎入營（二句）

山陰の雪深く兵營肅とあり　横濱　福田山雨樓

軍國の春倖力强く入營（いる）

北海道の旅

雛阿寒の雲を孕んで空靑し　尼崎　奥村丹路

學校卒業以來十年滿洲より友人漂然と來る（三句）

元町はなつかしい町そこで會ひ

君だからわが女房も連れてきた

子ぼんのうになつたか人形置いてゆき　張家口　岩崎柳路

島の俘虜ホームシックを語り合ひ　ジャバ島征服

無條件の一天張りで署名させ

スコールで濡れた分捕品の山

今更に踊らされたを悟る也　敵前上陸

合言葉闇に鋭くヤマとカワ

★

萬歳の聲が空氣を變えさしむ　大阪　津路紅多呂

夕燒へ眞直ぐ來たり物干場

洗濯に何々流はあつたかね　西宮　谷口綠葉

二月五日長男入院

入院の窓から紀元節の旗

意地づくで叩くタイプにあらねども

遮蔽幕ほこりたまつて有難し

線路まで持ち出し豆炭起してき　大阪　武部香林坊

町會長の候補風呂屋へなと賴も

シンガポール陷落

役割を果した兵へ螢飛ぶ　布施　上田翠光

盜み讀みもう一ト息で蓋をされ　大阪　市場沒食子

祝シンガポール陷落

英の牙城が又一つ落ち日本晴

もう陷ちたのかと日本人がびつくりし　奉天　吉田水車

舊正元旦シンガポール陷落

兩翼をもがれ禿鷹何處へ行く

祝上田君結婚

閨の中に新郎新婦立ち　大阪　須崎豆秋

きさらぎの櫻いたいたしい坐敷

小包の餅がとゞいた夢を見る

有名なバカできらくに暮してゐ　ハイラル　宮岡白峯

檢閲（二句）

防寒の毛も一列にならべとき

檢閲官睫毛の氷見のがさず

切符制亦小包が一つ出來

弟を弔ふ

あにいもと小さき裘あり空を見ず　松本　石曾根民郎

吹雪く夜は汝がおくつきの白き見ゆ

冷たき灯片言隻句われに殘し

火葬場に待つ低語あり月去らず

みとりいくとせ母は泣き灯を背にす

小康を得し想ひ出は瞼から

行末を待たぬ死に顏凝視め哭く

追憶に哭く父酒を俟つ夜話ぞ

汝が部屋の廣き空虛と闘へる　大阪　正本水客

雪解けの道をゆつくり遲れてき
雜誌開けばメタボリン、テラボール
情報は情報として我をまげず
食堂のよごれ氣にせぬ健康さ
演習よりずつと樂だと兵笑ふ　大阪　丸尾潮花

酒の味、小豆の味を忘れかけ
離婚とは春に淋しい便り聞く
責任者口數きかぬ日がつづき
親切を無にする程に辭退され
倦怠期映畫の戀を見て歸り　神戸　岡田某人

久濶の多少の嘘はとがめまい
いゝ歳になつたを後姿に見
舊友の愚痴きいてやる晝の雨
初對面ながら物資のことを訊き
聞き上手パイプが口を離れない
見送りの人へ借り傘ことづける
旅なれば炬燵の火にも甘えたし
まがひでもよし城のある春の景
忠志不死　院庄
古蹟の上を雲がゆく　尾崎　酒井斗風

病院を出て西風に突きあたり
信託をたより四人の子を育て
坐禪でも組まうか背廣擦り切れた
何もかもに負けてなか〳〵死ねぬなり
貧しさの中の素直さ珠數を持ち　大阪　北川春巣

純喫茶少女はマスクいつはづす
大阪へ歸つてスキー雨に逢ひ
馘になつておそまきながら義理を知り

祝シンガポール陷落

今日の萬歳は遙かに北を向く　尾崎　尾崎芳正

お造りのつまである身が威張つてる
おしやべりをマスクの下からもつぐけ　大阪　西尾栞
終列車の夫婦モソモソ何か食べ
美田も買はず保險大嫌ひ　中原銃人

新嘉坡陷落（二句）

英兵はかねて覺悟の捕虜となり
廻れ右ッ、昭南島は西へ向く

勳八等拜受

もたいなや生きて榮譽の日を得しよ　廣島　濱田久米雄

陷落のしらせ國民兵も寐ず
春の汽車櫻の花の横から出
紙幣ビラへ南無三切符制であり　大阪　清水史路

果報者A・B・C・D撰り喰ひに
けふからは噂するにも地圖擴げ

戰ひ終んで

鼠まで死んでる敵も射ちよつた

戰線より

母おもふ心おどけたことを書き

防空訓練二月十七日（史路夫妻）

濡鼠女なか〳〵負けてゐず
訓練へ硝子が割れてねぢ込まれ
汚れた位など、組長さん澄まし
露路の奥炭の買ひ溜皮肉られ

落下傘部隊ニュース映畫

空に咲く花か神兵天降り

海戰

片肺機泣いてすがるは整備兵

お通夜

孫入營それから眠るが如く逝き
次ぎ〳〵の戰果きく耳すこし呆け

野村大使を偲ぶ

つば鳴りの音をはるかに野村さん

特別配給

くじ引は鬼門あつさり棄權する

鋼、鐵回收

賣る鐵もなく瀬戸もの、火鉢撫で
鐵柵はあるが私のものでなく
はい〳〵鐵柵ですかといゝ家主
床の間は師の句表裝出來あがり
世界地圖受驗準備でありません
常會を出て粉な雪の顏を撫で

戰果の蔭に

訓練のあの頃憶ふこと多き
經驗の爲とは云はず捕虜となり

ラングーン陷落

天兵を待つ釋迦牟尼の寢て在はす

關印全土降伏

寶島命あつての兩手上げ

大阪　清水白柳子

昭南市長半袖で居るのかネ

西宮　西川愁水

女には緣が遠いとビルマ僧
防諜戰而も女のよくしやべり
美辭麗句外交員になり給へ

大阪　中内翠芳

白骨の一つ〳〵を語り合ひ
ムツツリやシヤレを言つてる暖かさ
過少評價氣付いた時に首はなし

下關　多田市多樓

勝名乘りシンガポールともう云はず
海戰の髯だ記念に置くと云ふ
箸握る事を習つて捕虜去に
この次が終點無事を祈る夜

岡山　逸見灯竿

此の鐵が彈丸となる日の思はる、
買物に出た妻家を忘れしか
立遲れ米英「まつた」とも言へず
生も死ももの、かはゴムの林征く

長崎　植山九天

皮靴の目立つ上海からの客
船出してユダヤは何處へゆくつもり

二女就學

捷報に姉と妹のランドセル

大阪　夷一笑

莫の火完全に消す男なり
轉業はズボンのひざが拔けたゞけ
紅生姜茶漬の膳をはでにする
植物の先生これは喰へますか
春や春草を食べよとおほせらる
生產報國かげろうも燃えてるよ

瘤癤を押さへるための墨をする　大津　鈴木石鹿

第一線の弟より

三十一字生死の境とも見えず

落下傘部隊

住民の瞳に天兵と見えつらん
組長さん犬にも顔を覺えられ
軍神は京大阪の人ならず　今治　月原宵明

監視臺栄種の花の見えるとこ

軍神九勇士

散り際を見たか日本の櫻花
戰果擴大地名暗記の暇もなし
「敵は幾萬」辨當箱は開けた儘
立話やつぱり喰べる事だつた
春の雨大根一本下げてゐる　大牟田　高田抱逸

配給の小豆九勺へ少さく採め
理想選擧往復ハガキで濟ましたし
徴用の前職そうでもない手付き
やつとやつと參事になつて馘られ
煙毒が奬勵畑と知らず舞ひ　下關　國弘半休

劍道の構へは母をこわがらせ
劍道と酒で鍛へた署長が來

鐵道奉公會山口道場にて

陷落を講師見て來た樣に云ふ　西宮　阿萬萬的

目を閉ぢた女は夢を追ふ姿
荒鷲もかくやと鳶を見てました

ふと影を見て驚いた夜の寒さ

藥師寺を訪ねて

じうと見れば如來は友に似てゐます　尼崎　小林文月

長女の受驗（三句）

神棚で待機してゐる受驗票
番號で占つて見る受驗票
寄宿への本箱の事夜具の事　尼崎　飯尾寄與史

配給になつてお酒を飲みならひ
衣料切符ハンカチ買うただけで逝き　大阪　小川恒明

僕だつて徴用令は來るんだい
まだ儲けたいが旦那の病氣なり
歩調トレツされる兄貴と街を行く　大阪　浪玲之介

日めくりは「チチシス」の日のまんまなる
人生は引き算である壁暦
會社設立未だし梅の便り開く　津山　河田一將

牛肉へ菓子へ笑へぬ蟻の列
沈思には非ず盲人佇みぬ　大阪　八竹正柳

象牙の塔でもニュースだけ聽いて居る
鬱蒼とパーマネントの亂れやう
乞食にも貰ふ準備が要ると見え　堺　麻生アート

腦みそに階級があり憂ふべし
點々とともる灯のあり我に似し
春の旅衣料切符は置いてゆこ

同舟近詠

北京　森東魚

臣道一途
奉公の道は一と筋神代より

眞珠灣大捷
演習ぢやないと分かると沈みかけ
眞珠灣目をこするうちもう沈み
パジヤマ姿で高射砲〳〵

プリンスオブウエールス
遙々と來つるものかなすぐ沈み
土俵入りだけで横綱それつきり
チヤーチルの頼む木陰はみんな洩り
懐を當てにしあつた醉がさめ
ハロー〳〵弗で戰さが勝てますか・

リンドバーク非戰論
それ見たか見たかとたつた一人居る

月月火水木金金
暦からかへてかゝつて今日があり
日の御旗鰐もコブラもあらばこそ
分捕りでみれば流石に「持てる國」
印度兵土嚢代りに置き去れ

落下傘部隊
スコールと別に天から兵が降り

松山　前田五健
その中に義江のバスもある蛙
ラケットに日本晴の音をたて
春來る草の敏感
亢奮へ町の東條多い事
やりぬくの歌に口紅無駄でせう

金澤　安川久留美
朝の體操二合何勺を考へてやり
ぱん、うどん、ビール迄にも認め印
突き出しにアマサギ三つ圓料理
註「アマサギ」は北陸でとれる寸餘の小魚なり

仁川　池田可宵
さあ起きた今朝の勿態ないニュース
よい縮緬モンペを着てもよい縮緬

兵庫縣御影町　長崎柳秀
唯歩くだけです牛の農繁期
お膳立男のするは哀れなり
金釦將棋の熱ををしがられ
松の色なつかし青し故郷近し
賣る人の慾は秤が知つて居り

神戸　潮田明坊
金持のもの一つ云ふ咳ばらひ
この家皆達者干物繼だらけ

名古屋　鈴木可香
むつき替へる主婦に集待たされる
生地付きの方を洋裁受けたがり

山口縣　三原狂路
二月十四日帝國陸軍落下傘部隊降下公表
落下傘部隊があつた神の國

蘇るシンガポール
昭南島もう海賊の影もなし
逆境の人とも見えず髪を染め

奈良縣磯田町　嶋田翠峯
娘に指圖位いは出來る長病ひ
出し雜魚もぜいたくですかそうですか

長野縣須坂町　高峰柳兒
洋裁へ通ひ・點數世帯めき
南方へ移つた初便りをかこみ
嫁き遅れたゞせば凱旋待つ身分

滿洲國鳳凰城　菊川泰平樂
昭南島と地圖書き替へる手のふるへ
日の丸の街に嬉しい雪となる

奉天ニュース館にて
強行軍見てゐる足の地につかず

滿洲　上倉泥柳
日々挺身煙草のみ殘し
心底を衝く萬歲も移民村

麻生路郎著
新川柳評釋
價・八〇　〒・六〇
地番二八一丁二通岸海島出市堺
不朽洞
振替大阪三〇三九二番

川柳漫釋 漫筆は動く

小畑自有浪

連峰の雲から全機還へり來る　（靜觀堂）

「呀ッ！還つたッ」
「還つたッ」
「還つたぞウー」
「一二三四」
「十五、二十」
「うわーい」
「ばんざあーい」
「馬鹿ッ、騒ぐなッ」
「何ッ」
「還つて來るのは當り前だ」
「と云う貴樣は何んだ」
「と云つて、こ、これが泣かずに居られるかい」

末っ子も假名の日記をつけはじめ　（孤　篷）

「ねエ父うちやん、末子が兄ちやんの眞似をして、ほら、此の間から日記をつけて居るんですよ」
「ほーう、どれ〳〵、なる程〳〵、なある程、へつ〳〵〳〵小ましやくれたことを書いてゐるぢやないか、はつ〳〵〳〵」
「ほつ〳〵〳〵」
「おやツ、キヨウオトウサントオカアサンガケンクワヲシマシタ」
「まあ」
「オトウサンハオカアサンヲタ、キマシタ」
「あなたッ」
「スルトオカアサンハオトウサンニオチヤビンヲナゲツケマシタ」
「まあ」
「馬鹿ッ」

配達はもう走つたりなどしない　（豆　秋）

「おい、此頃何か、新聞の朝刊ちゆもん無いよになつたんか、何、これが朝刊やて、あほ、今何時やと思うてんね、なんぼ朝刊でも今頃に持つて來たら晝刊やないかい、何ッ氣に入らにや、えゝッ、大阪の發行所へ買ひに行けて」

履歴書に士族と書けと祖父は云ひ　（海　朗）

「わしも、五十三年四ケ月と十七日前にはおぼえがあるぢや、履うて頂く時には履歴書の書方が肝腎ぢやで、心して喃、あゝそれから、士族と喃目立たぬ樣にはつきりと喃」

氣の弱い主任の下で勤務する　（牛　歩）

「君々、君今、廊下で專務さんと出合つたろ」
「はあ」
「あの時、もつと何故、ていねいに挨拶をしてくれんのかね」
「然し」
「然しぢやないよ、重役さん達には特に氣をつけてもらはんと、主任としてのわしが困るよ、呀ッ、おい〳〵、社、社長さんがお見えになつたよおいッ、ネクタイがゆがんどる」

「さうよ、今日は會社の修養會だつたんですもの」
「ほう？」
「でも、導師役の社長さんが居眠りなんかなすつて、ほつ〳〵〳〵、それを笑つたら、お前達はしんけんにやつとらん、なんて、怖い顏をして睨みなさるんですもの」

配給で添つた女房でないものを　（沐　天）

「別に配給でもらひなはつたわたえやおまへんねやろ」
「さうや、選りに選つて選り粕が當りくさつたんや」

大阪へ來てまで頭ぢらせる　（詩　朗）

「まあー、わざ〳〵下關から」
「えゝ、でも、やつぱりパーマネントは大阪でなくつちや」

嫁がせてお灸のあとが薄れゆき　（貫志子）

「まあお前、行つてからちつともお灸をすえないんだね」
「だつてエ」
「月に五日はすえてやつて下さいつて、あれ程しゆとめさんにもお願ひしといたんだがね」
「いゝのよ」
「よかあないよ、もらつてしまつたら自分とこのものだと思つてぞんざいにするなんてあたしやあ氣にくわないよ」
「まあお母あさん」
「可哀想に、そのお灸をすえなけりやあお前、熱が出る程肩がこる性なんだからね」
「だからさ、うちの人が」
「まあ、ぢやけんにするのか

い」
「うゝん、毎晩肩もんでくれるのよう」

婦人常會泣きやまないぞと呼びに來る　（石　甲）

「お待たせ致しました」
「これはどうも」
「あのう、お取りつぎ致しましたのでございますが」
「へい」
「御用件はとおつしやつてゐらつしやいますので」
「えゝッ、あのう、わつしの嬶の奴がですかい」
「はい」
「あんちくしよう、がきが泣いて泣き止まねエから、女の常會なんかどうでもいゝ、すぐ歸へりさらせつて、へい、かようにひとつ」

捷報へ炭つぐ妻も手を休め　（市多櫻）

「ひえーい、まあ、あのシンヂュワンで」
「吃驚は後廻しで、早う神樣へ御燈明を上げて一本つけな」
「へい、けど、シンヂュワンてどこだんね」
「あほッー、」

披露宴いきなり子供産む話　（治　男）

「尙、此上、御新婦に對しまして、希望並に御願ひ致しまするところは、世は擧て正に非常時、産めよ殖せよ地に滿てよの國策に順應されまして、早速明日にでも立派なお兒さんを」

出勤を見送る妻もしなびて居　（露　斗）

「ほう、お隣は晩に映畫館で待ち合すつてことにして出かけて行つたね」
「昨日は大丸の入口つてことでございましたが」
「はつ〳〵〳〵、やつぱり新婚ぢやね、よし、ではわし等も負けん氣で、一つ大いに若返つて、どうぢや、今晩どつかで待ち合さんかね」
「はい、お供させてゐただきます」
「はあて、どこがよかろうかね」
「左樣でござゐます、文樂へも永らく御無沙汰致して居りますし」
「うむ、歌舞伎座へはたしか羽左衛門が來とる筈ぢやが」
「あゝわたし、今晩入齒が出來上る筈になつて居るのでござゐますが」
「うむ、わしも鍼醫者へ行つて來んと、昨日からどうも腰の具合が面白くない」
「では、若返りは又明日にでも」
「うむ」
「行つてゐらつしやいまし」

鷄へ蹋めはこれもわが家族　（丹　路）

「トウ〳〵〳〵〳〵、やつぱり可愛もんだね」
「さうね」
「これぢやどうも、かしわに出來んね」
「でも、もうお葱とおコンニヤ買つて來てますのよ」

裏の方で聲あり村の荒物屋　（某　人）

「居つてかーい」
「居るぞうーい」
「これもろうて行くぞうーい」
「御苦勞ぢやあー、呀ッ、しもた、彼奴どこのどいつで、何を持つていによつたんかいな」

催促文氣が小さうて反古になり　（美奈子）

「えーと、此處二三ケ月の間に萬一御支拂なき場合は、と、これではどうも、やつぱり角が立ちすぎるかな、では、えー、御用立申上候一金五圓也其後十年間未だ一回の利息も賜らず候が如何あそばされ居り候や、と、こらやつぱりあかん、代書屋に賴んだろ」

うちの娘は少しくづれた坐りやう　（快　哉）

「まあ、本庄はんとこの娘、お行儀の惡い、あら、うちの娘も、まあ、あんた、娘の子のくせに其の座り方はなんやね」
「だつて、ズロースがスフなんですもの、きちんと座つたらやぶけてしまうわよ」

松茸に似た淑髮が前を行く　（正　柳）

「なあおぢいさんや、この前を行きなはる、松茸の樣な頭をした洋服の人、男ぢやろうか」
「はあて、男にしてはどうもおいどの振り具合がおかしい樣ぢやが」
「まあいやらしい、えゝ年をして、やつぱりそんなとこへ目をつけなはる」

配給品お世辭なんにもならぬもの　（幸　士）

「松田はん、あんたお嫁さんまだだつか」
「へい」
「そんならわたえに、是非、世話さしておくんなはれな」
「へい、賴んまつさ」
「それで、あのう、これ、もう一貫目程」
「そらあきまへんわ、配給だつさかいに、ぴりつともなりまへんね」
「さよか」
「すんまへんな、それで其の」
「さいなら」

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療 毎午 日前
醫學博士 佐多愛彥 電話 北 8 8
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 電話 淀 1151
內科
市電堂島中町停留所北西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電北八二八四

武玉川四編研究（二九）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

（658）**命と言ふ字むごく遣れ**

東魚＝やたらに腕にほられたり、文に書かれたり、あの大事な命と云ふ字が、どの心持ちであらうか。

塵山＝遊女の腕に刺青した命の字が、屢々金策に利用されるのである。

省二＝命は一ツよりないのに、字となれば、やたら粗末に遣はれる―苦肉の策。

（659）**背と足との赤い氣違**

東魚＝何やら口走る口元と、素足の細脛の寒さに曝らされて、赤いのが一層氣違ひの哀れさを、そゝると云ふのではないかと思ふが、まるで違つた正解があるかも知れぬ。

塵山＝嘴と足との赤いのは、隅田川の都鳥であるが、謠曲の『隅田川』をよむだ句歟とも思はれる。

省二＝「赤い」で氣違の哀さが、一層深められる。

（660）**異見してつく〳〵見れハ美き**

省二＝間違ひがあつては、いけぬから異見をする。異見しつゝ見れば見る程美しい。事の起り易いのも尤だとは腹の中。

東魚＝面白い句と思ふ。「つくづく」が大いに働いて居る。

塵山＝伯父さんも、しばし見惚れて感歎する。

（661）**赤子の頰を付さしにする**

省二＝林檎のやうな頰の美しさ。一寸吸つてみる。

東魚＝私にも貸して、などと女同士が、次ぎ〳〵抱きいつくしみ頰を吸ふ趣。

塵山＝赤子の頰は清く美しく、「枕草紙」にも書いてあつたと記憶してゐる。

（662）**有し昔を咄すうは玉**

東魚＝木賃などに泊合した旅人が灯を消した寢間に、昔語をする場合であらうか。

塵山＝前解の如くであらう。

省二＝「有りし昔」などいふ言葉の感じからは、木賃などより高級の方ではなからうか。

（653）**常世か夜着ハ梅さくら松**

東魚＝梅松櫻を焚いて寒さをしのいだ、謂はゞ、梅松櫻が常世の夜着のやうなものだと云ふのだ。

塵山＝少し拵へ過ぎた句で、面白くないと思ふ。

省二＝いかにも作りすぎて居る。「梅櫻松」の順に置いたのは、謠にも『今も梅櫻松をもちて候ふ』などある。

（664）**馬のくハへる蓬生の藁**

東魚＝低い軒から垂れた藁とか、垣のほぐれた藁とかを馬がかむと云ふので、佗しい草家の趣である。

塵山＝蓬生の藁では詞が足らず、餘り面白い句ではない。

省二＝馬も淋しさのあまりであらう。

（665）**鼻くたに成て古郷へ戻りけり**

省二＝鼻くたになつては、どこにゐても人に忌み嫌はれる。さうなると一層故郷が忘れ難くなり、遂に戻る。

東魚＝一旗擧げる氣で、草深い古郷を出たのであらうが、誘惑に勝てなかつた、笑止な姿を忍んで戻るも忘れ得ぬ古郷のなつかしさである。（『古郷へ廻る六部は氣の弱り』と一脈通ずる心持ちがする）。

塵山＝草津か有馬の温泉に久しく逗留して、歸郷したといふ意歟と

川・柳・書・架（82）

獨活の大木

大谷五花村著

▼著者の「序に代へて」の一節を拔く。

世の中に役立たぬものに「うどの大木」といふ事あり。而もうどの大木など見た事もなし。

本書も大方世の中に何の役立つものある可しとも思はねど、著者一流の我無沙羅文章、讓遜して「題」として、ふさわしいかも知れぬ。

然し、先づ第一に、世に「狂句」と混同されてゐる「川柳」の爲めに、一言を述べ、次いでは、川柳と狂句の混せ合せの古川柳を片ツ端から評釋を試みて、讀者本位の讀みものとしたがアトは今迄書き集めた出鱈目隨筆、我れ乍ら驚き入つた傍若無人のなぐり書きなり云々（以下略）

▼目次を左に、

川柳と俳詩、川柳人生、支那散見記、酒論・風論・紅葉論、銃後の世相、北支滿鮮の旅、中支の旅、川柳東北の旅、趣味の白河話、北滿地平線、創作集

▼昭和十七年二月二十日發行、B列六號三〇〇頁、定價貳圓、發行所東京市澁谷區千駄ケ谷五丁目九九八番地日本俳詩協會

▼著者は福島縣人、貴族院議員。「東北川柳」の主宰者として名を知られ、目下は「俳詩時代」を主宰、日本俳詩協會の會長である。

思ふ。

(666) **似セ熊胆の猿叫なり**

省二＝猿が叫むで居る。あれも、やがて殺され、似せの熊膽として名を殘すであらう。

東魚＝叫び歩く猿も嚮て打たれると膽をとられ、熊膽の似せ物に賣られる奴だ。つまり熊膽になる猿めが叫むで居るわいとの意。

塵山＝旅人などが猿の叫聲を聞いて、あの獸も獵人に擊たれると、その膽をとられて、熊膽と稱して賣られる、と想像するのであらう。

省二＝雜誌「糧友」に上代博士の「膽汁の話」が載つて居る。參考に一節を寫してみる。『膽囊の無い樣な動物といふと、馬、鹿、象、らくだ、鼠、鯨其他であつて、調べてみると此他にも隨分ある。鯨や象に膽囊があつたら隨分大いだらうと思つて或人に探して貰らつたら無いと云ふことで後で赤面した……吾邦では熊膽といつて熊の膽が民間藥として古くから用ひられて居る。これは後藤流醫方の祖である後藤艮山が推賞したのが始りであるらしい。勿論それ以前から膽が用ひられた事はあつたゞらうが、所謂熊の膽として一般から買ひ被られる樣になつたのは艮山の說いたところに發するものと言得よう。艮山は萬治二年江戸に生れ後京都に移つた。後藤左一郎、養達と稱し、古醫道の泰斗といはれた。

艮山の說は一氣留滯の說と言て、百病は一氣の留滯生ずとし、順氣を以て治法の綱要とした。この人好んで溫泉、熊膽、艾灸を用ひたので、世間では呼んで湯熊灸庵といつたさうである。熊膽蓄椒灸說を著はした。艮山手簡によれば、熊膽は一切卒病急患に之を用ひて元氣を喚起し、藏寒を開通するの効あり云々と述べてゐる。彼は昔人が熊の膽を輕視し、これを用ひる者が至つて稀であり、たゞ皮を以て鞱とし席とするにすぎない有樣であるけれ共、膽の中では熊膽が一等であると主張した。

(667) **呵る時にハ寒聲の利**

省二＝張りが利いて、强い感じを與へる。

東魚＝矢張り叱るも藝事で叱るのであらう。

塵山＝寒聲をする弟子に對して、師匠が叱咤する。

(668) **繼くさを枯らして歩行親の口**

東魚＝何のかのと文句が多い親なので敬遠されて娘の繼も成就せぬ。

塵山＝無慈悲な女親の所爲で、後には娘を玉無しにする事になる。

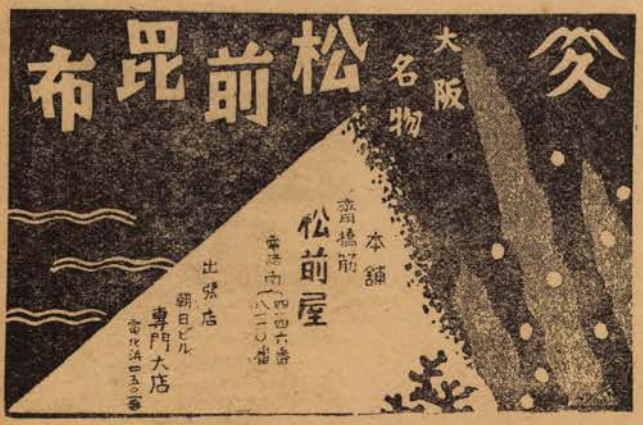
省二＝世間、往々にしてある。

(669) **九折飲たいほどに松の風**

東魚＝山道に颯々として松の風が渡る。乾く咽喉に大口あけて一ぱいに呑みたい程の、すが〳〵しい風である。

塵山＝「飲たい程」とは言ひ得て善し。

省二＝確に奇拔にして妙趣ある言ひ方。



句會案內

御希望の方へ

目下句會案內の名簿を整理いたして居ります。新に句會案內御希望の方は住所姓名雅號を詳記して句會係宛に御申込み下さい。轉居された方は新住所御一報願ひます。

社內・句會係

南支を征く

白鳳小林秀一著

▼卷頭に古莊大將の題字、大谷貴族院議員の序文。

▼著者の「まへがき」の一節、召され勇躍、聖戰に參加す榮光に浴した私はその戰線より光榮なき程度の通信や句を、知友や宅へ送つたところ、その一部は大阪每日新聞を始めとして、各新聞、雜誌に掲載され好評であつたなどと御世辭とは思ふが、そう言はれて、すつかり思ひ上り、戰線に於て體驗したこと、親しく見聞した支那のことどもと、戰線にて詠める拙い句を纏めて刊行することにしたのがこの本である。（以下略）

▼昭和十五年三月十日發行、昭和十五年四月十日再版發行、B列六號、一九〇頁、定價一圓、發行所東京市小石川區小日向臺町一ノ四一潮文閣。

▼著者は津山市の川柳人である。バイアス灣敵前上陸後の南支の風土記を興趣深く描出してゐる。川柳人に一讀を薦めたい。

★翼賛選擧の誓

▼選擧も大東亞戰爭完遂の一業です、必勝完璧の固めに皇民わたくし達け眞心もて參加します。誓つて世紀の眞議會を現はさずに措きません。

▼議會の神隨は人にあります、今こそ議會も淸新を要します、皇民わたくし達の代表は眞に人の中の人たる今日の人材を選びすゝめます。誓つて誤り惑ふことはありません

▼一票も自己の魂です、强く、尊く、怯みなく、鄕土にあらぬますらをの意志にも問うて皇民わたくし達の任を公明に果します、誓つて小義や情實にけがすことはありません。

▼わが日本の總選擧です、畏くも民意にお質しあり給ふ弘き御下問です、皇民わたくし達け忠誠をこめ、大御心に副ひ奉ります。誓つて小やかな一票たりともおろそかに致しません。

近作柳樽

路郎選

ソプラノのきらひなまゝで妻老ける　和歌山　濱野二重丸（破鼓改め）

戰局の動きを動く咽喉佛　同

童心になつてペンキ屋迷彩し　同

組合の事務所喫茶の跡を借り　同

百圓が小錢にならぬトンカラリ　同

翼贊の急所神代へさかのぼり　同

榮養の點のみならず鰯燒く　同

決戰のいきれ車掌氏窓を開け　同

女事務默つて居ればわが仕事　東京　山田宙望

樂隊について行きたい春の空　同

月月火水木金金拜みたらぬ兵に謝す　同

靜坐せば汽笛も聞ゆ旅の春　同

アパートの炊き出すまでに靴磨く　同

廢品を抱へ奥さん顏を出し　同

今迄の僕と違ふと云ふ丙種　京都　中井白影子

馬鹿になるくらひの肚も出來てゐ　同

謄本で知つた惱みと知らぬ繼母　同

敵を追ふ顏は鏡を忘れてゐ　同

その戰果神か人かと思ふのみ　同

大戰果一言居士に聲もなし　大阪　石田沐天

一列の順をくずして產氣づき　同

歸鄉して我世の春の鍬を持ち　同

呆つ氣なさ下意の行方は泡ときえ　同

僕は日の丸あたしはパンよ花の下　同

タイピスト妾は惡阻とも打てず　和歌山　秋月宏方

闇と云ふ言葉まゝごとにも使ひ　同

時節柄ちとけち臭いとは云はず　同

國策に沿うて五十になつて生み　同

米英のことよく讀めば痔の藥　岡山　岡田笛六

劍道の教師の他は能がなし　同

護岸工事情緒も糸瓜もあらばこそ　同

クラス會もうこんなにも幸不幸　同

特別攻擊隊

白頭山節も躍く眞珠灣　大阪　野元吐空

ロッパ劇を觀る（二句）

ざーますが寄つてうれしいロッパ劇　同

汗を拭くロッパへフリユート忍ばせ　同

飛・燕・往・來

★經千省二氏（朝鮮より）（削略）大阪も寒い事と思ふ。半島は三寒四溫といふ順序でありましたが近年そんな調子に來らず三寒に入ると半ケ月もそれ以上も續く、火ノ氣のない部屋で零下四度が今迄の一番寒い朝でした。大抵は零度以下。暖房持は燃料の關係があり木炭は配給制故に欲する儘にならず、やはり冬中は溫泉生活ならざれば無理なり。昨年九月上旬、老妻が安カメラを求め慰みに始めて寫す。勿論寫る筈もなからうと其儘フヒルムは、放かつてあつたのを數日前燒附して貰らつたもの一枚御笑ひに供します。此寫眞を撮つた二日後容態急變して危篤に陷つたのだから私には妙な氣のする寫眞でもある。寫眞說明——曾て柳友から川柳手拭を數本貰らつたもの色々に利用す。而してノレンを製作したのが寫眞に撮れて居るので此寫眞では三枚寫つて居る。御父君の「君見たまへ」が案外判然と撮れて居る。臍の緒切つて始めて撮つたものとしては上出來と賞めて貰らへさうである呵々寫眞大家綠雨先生の御批評を受けねばならぬがフヰルムが更に手に

先輩と言はれ税金拂はされ　大阪　同
弱すぎる敵に物資がありあまり　同　山本　葉光
特配の小豆も酒も蔭膳へ　同
落下傘部隊　土人に拜まれる　同
無條件降伏髭を剃つてゐた　同
なり上り髯も立てます年となり　島根縣　田中　弘樓
情熱の捨て場芝生はいゝところ　同
手拭の穴を見せ合ふ風呂加減　同
母なれば米まで持つて泊りに來　同
大鳥島と名づけ日の丸ひるがへ　伊　大阪　丸島　利生
つく〳〵と印度の俘虜を見る勇士　同
使用人でありたくはない今朝の雪　同

シンガポール陷落

海賊の稼ぎためたを吐き出させ　同
米英にいつも悲しい日曜日　姫路　同
前は山後ろは海へ詰將棋　小川靜觀堂

星落早やくも落つ

白旗にいまし夕陽は斜なる　同

（海軍落下傘部隊）

セレベスの一月寛裳羽衣の曲　同
自由主義經濟時代から社長　兵庫縣魚崎町　谷口　寒草
どの道も彼女を偲ぶ道ばかり　同
米足らぬことをうす〳〵子もさとり　同
悲しみの人にレールはよく光り　同
奉戴日から禁煙禁酒　松江　岡崎　祥月
十二月八日世界はおそれたり　同
南洋へ征け征けと言ふ春の風　同
衣料切符結局買はぬ事にきめ　同
子が出來て同窓會に忘れられ　尼崎　長谷川三司

シンガポール陷落

軍政が敷かれてトーマス用もなく　同
轢死人お守札を二ツもち　同

子のための我慢冷たき世評聽く　大牟田　池田　有明
還る子を迎へる水は淨く打ち　同
朝禮に和裝は襟をかき合はせ　同　富岡　巨人
降伏の使者半袖に半ズボン　大阪
あたら名畫も倉で寢て居る　同
配給の苦勞も知らず子は育ち　同
女專出の勝氣な姉は嫁きおくれ　大阪　平井　流舟
爪かんでまだ居る路地の二階借　同
救急車春にそなへて磨きけり　同
マスクした女はつきりあくびせり　大阪　米田　春童
二階借本氣にマレー語を習ひ　同
破談して自分の理想知らせとき　同　松島　波人
湯の街の風は二階の高さ吹く　大牟田
兵泊る日の鶏肉は本家から　同
性格を見せぬマスクと知つてるか　同
親子して未來の嫁と決めておき　大阪　浪花駒志希
見ぬ振りをして居て乙女らしくな　同
音樂はいやだ傷つく過去がある　同
父親に戰地思へと又言はれ　大阪　桝岡　詩朗
双葉山配給程の鹽を撒き　同
下足番してまで親の足しにして　同
不器用で無口で殊勳甲となり　島根縣横田町　新出谷百合子
便箋が減る度祖國遠ざかり　同
半轉業變つた音に目を瞳り　同
疲れてるのか内氣か車掌聲細し　神戸　湯淺小城子

長子出生

安産の父まで褒めて産婆去に　同
名刺忘れた保險屋映畫觀て戻り　同
金持へ叫びたい氣の休閑地　島根縣横田町　新出谷一聲
子が一人欲しい衣料切符見る　同
子を捧げ銃後は土に生き拔かう　同
爆音に全機無事かと仰ぎ見る　戰捧會員　露本　笑里

入らず後トが寫せない。器械は神戸製で私の關係會社が委託販賣。（此頃は器械が來ぬらしい）さくらフキルムパンクロF小型の安物。お目に掛けたのは引延ばしたものなり。

内地新聞が配達されたから一讀の事に致します。

一月廿五日　笑眉主拜具

（アート宛）

★小畑自有浪氏（福知山より）講啓毎々御懇篤なる御言葉難有鳴謝候。今月號も又々御厚情を賜り候段萬々

★左記の通り住所名が改稱されました、宜しく御諒承下さい。

奥村　丹路

尼崎市武庫庄字武庫之莊四丁目四十三番地

★小畑自有浪氏（福知山より）講啓毎々御懇篤なる御言葉難有鳴謝候。今月號も又々御厚情を賜り候段萬々恭く厚禮申上候。御座敷芝居の名稱眞に結構に御座候。就ては今後はほんとうに御座敷でやれる芝居の脚本に、より一層精勵致可候間よろしく願上候。こうした簡單な芝居の普及は愚生年來の念願にて未だ常會劇の云々せられざりし頃より兎や角と申し居り候ひし程に御座候。

然し日本の國民性として音樂と芝居の普及はなかなか困難らしく候。愚生目下柄にもなく、嘗て近衛さんが「覺賢の道」と題してラジオに依つて全國常會に話され候「大伴部博麻」の赤誠を胸色致し居り候。筋は御承知とは存じ候へ共、（中略）――「賢身輪忠」なる題のもとに全十二

御守は持つては居れど死ぬ覺悟　同
千人の針に應へる時ぞ今　同
白衣ふと雲雀仰いでよろけたり　名古屋　八幡　勿來
父の日を忘れず着いた軍事便　同
軍事便椰子の景色は涼しそう　同
袖丈をつめた女の世間學　大阪　橋本美奈子
自作の大根へ嬉しいしりもち　同
百點の切符へ批判と反省と　同
春四月友の便りも繪封筒　名古屋　松井靜子
主食副食兼用の飯がふき　同
深刻に米の旨さを子は知つて　同
女子大を出れば後妻の口があり　香川縣　早馬清富
模型機の行方嬉しく見失ひ　同
見合ひふと入學試驗思ひ出し　同
一列へ岩波文庫持つてたち　神戸　平川久枝
演習中訪へばモンペで手をつかへ　同
國民儀禮女靜かに衿あはせ　布施　原田輝親
子を埋める梨や蜜柑の山蔭に　同
學校に行くをどんなに待つたこと　同

翌二十二日地震あり

奇蹟あれ吾子蘇れ朝の地震　廣島縣竹原町　黑本芳泉
日本刀床の飾りでなかりけり　同
五割でもまだ惜しい妓も豫約濟み　同　森山さわだ
殺された血を洗つてる樂屋風呂　同
影ありてまた面白し夜のペン　出雲
貧乏で泣くとは弱いお前だね　同
慰靈安かれ好きだつた花捧ぐ　奈良縣　小谷華素兒
仕事仕事ターミナルを出る人の波　同
背の子をあやし貯金の順を待ち　同　谷川小宰相
山の幸送つてくれる里があり　滿洲
或時は馬が頼りの濕地征く　同
慰問品分ける手と手の荒れた事　同
兵舍から見る街の灯は無駄なやう　同　木下誠治
ネクタイの色が澁うて苦勞人　大阪
牛肉を提げて戻れば「闇だらう」　同
藝名を消したスターは見直され　疊中　高山武士
十割にしては粗末な藝者來る　同
論告の情に悔いたか被告の瞳　長野　堀內敏郎
早春の按摩の流す笛はるか　同
二階借り湯呑の水を屋根へ捨て　大阪　橋口松嵐
宿帳へ二人の齡を考へる　同
常會へ咽喉卷いて來てよく喋り　大阪　有馬千斗
二合三勺では足るまい背を流し　同
新世帶もう舊惡のばれかゝり　大阪　大西光陽
鋭鋒をゆるみず妻は涙ぐみ　同
その年齡を云はず着物を地味と云ひ　大阪　中島晩成
公用の二等生憎込んでゐる　同
病閑は四五日がかりの手紙書く　豐中　澤久つらら
フライパン男の手つきあぶながり　同
發車ベル慾な土產が慌てゝる　大阪　松岡照二
星港陷ちて褌締めなほし　同
母點字までも習つて元氣づけ　京都　小坂ふじ彌
兵隊のやはり子供に取卷かれ　同
入れつけぬポストは頼りない思ひ　大阪　恩賀紀川
あたしだけで判る電話の仲になり　同
誘惑に勝つて歸つた夜の膳　青島　菖蒲榮城

外人國籍明示の腕章を卷く

腕章の色樞軸といふ誇り　同
救命具無事に枕で終りけり　戰柳會員　平岡哇柳
洗濯は自分の氣持だけ白く　同
ねんねこは女としてのいゝ姿　大阪　宮田不二
極樂がわかりかけてる風呂加減　同

場の大作を試み居り候。さて書いてどうするか、目常もなきに此の苦勞は愚生としては博厩以上の一ト苦勞に候へ共、大東亞戰時下、何か命ある仕事を成し遂げねばと、愚生とても人並になやみ上げた結果のあらはれが此の博厩と取組みの壹幕、御笑ひ被下度候。　拜具

（三月十四日）—社宛—

★橋本緣雨氏（津山より）嚴島から錦帶橋へ來た。これから廣島の大會に出席。　—社宛—

★安川久留美氏（金澤より）

折にふれて

古九谷のくすりの味と酒の味
酒とろり路郎の髭の白からめ
—路郎宛—

★市場沒食子氏（大阪より）—（前文省略）今度遞信病院へ轉しました。幸ひ尾崎醫長さんも居られる事ですので、又勉强してみやうと考へて居ります。本日尾崎醫長と當院內柳壇新設について一寸話しました。それから藥局の連中と「川柳雜誌」を見てゐる中に一つ創つて見たらと云ふ事になり「獨身」の題で作り、私が選をしてみましたが本當の素人にしては中々上手で、此の儒捨てるのもどうかと思つてゐたら四月募集吟の課題が「獨身」となつてゐましたので、投句することに極めました。病院もまだ工事中ですので、出來上つたら柳會を催したいと思つてゐますので、ぼち〳〵乍ら準備をしたいと考へてゐます。

（三月五日）—路郎宛—

なぐさめの言葉まとめて扉をたゝく　神戸　市川　治男
白紙とは當り觸りのない言葉　同　山上　笑風
マレー語〳〵支那語が少し淋しい日　岡山　同　佐伯　鷄城
燕來る昭南の國いゝ便り　同　山本耕一路
お上手なピアノとお婆さんの世辭　岡山　同　山本耕一路
煉炭のくさみと猫も知つて寢る　松山　同　山本耕一路
世紀の車大きく軋みシ港陥つ　松山　同　山本耕一路
この春の燕昭南島の色　同　山本耕一路

シンガポール陥落

込み上る涙日の丸やけに振り　大阪　水谷　虻蜂
椿落つたゞそれ丈けの淵に佇ち　松江　同　大和　太郎
趣味ばかりなんでも御座れ主義を持ち　同　大和　太郎
南洋のバナナの下で暮そうか　大阪　同　久保甲斐郎
呼聲はそれでよろしい補助車掌　大阪　同　久保甲斐郎
清貧にあまんず部屋の顯微鏡　大阪　同　谷崎　一昌
消防手頭巾をとればうら若し　大阪　同　谷崎　一昌
滿員車今兵隊さんの胸の下　松江　同　宮森　品枝
衣料切符買ひたいものはあるけれど　松江　同　宮森　品枝
うれしさをわかつ夫は銃をとり　同　宮森　品枝

父の石碑を建てゝ

男にはなれぬが石碑立てやろ　廣島　同　大山　露斗
石碑建つ生前の父耳遠し　同　大山　露斗

婦人警防隊結成式

モンペをはけば日頃の母でなし　兵庫縣　同　小林かづさ

鮮人の創氏改名

創氏改名島津忠直なども出來　同　佐野　牛歩
更生車犢らわれてから金を取り　大阪　同　佐野　牛歩
更生車成る程便利の悪いとこ　島根縣三成町　同　西村　早苗
風邪知らぬ男銃後の作業服　兵庫縣　同　吉本　尙代
慰問品切符で買つた物ばかり　金澤　同　入口　障子
戰へば勝つ國にして櫻咲く　愛媛縣菊間町　同　岡田　香桐
戰などは忘れベルトの音に生き　同　岡田　香桐
見學は屋上からの話だけ　大牟田　同　藤瀨　藤樓

脫出船壓沈

死水が鹽つぱいけど我慢しろ　大牟田　同　濱本　國雄

シンガポール市街戰

國際將棋中盤戰の不退轉　大牟田　同　堀　京美
陥落へ今日の飛行機仰ぎ見る　豐中　同　三輪　丘堇
切符だけ貸しませんよと呉服店　金澤　同　山野　一角
兜の緒締める暇なく勝ち續け　松江　同　入澤　笑鬼
シンガポール陥落國旗は僕が出す　大阪　同　齋藤　三丸
悪運もつきて要塞頼りなし　大阪　同　坂井　楠水
軍事便筆豆な子とうらやまれ　名古屋　同　東　正美
新世帶こゝも銃後の赤襟　山口縣小郡町　同　長野　井蛙
ゲートルの足だけ見せて草枕　兵庫縣　同　山森　蜂郎
自爆して一機一艦主義を言ふ　堺　同　村上　角堂
まだ續の續きと見える新家庭　札幌　同　杉山怒來歩
雇兵捕虜は給料など案じ　諏訪　同　牛山　臥牛

九州の旅

車中の話題もやつぱり米の事　京都　同　奥田　杜的
フイルムの中の童心風に似る　大阪　同　藤森小雅子

米潛艦我本土を寇ふ

負けついで破れかぶれの王手と來　津山　同　粟井　蛙柳
栄の花に入學の日を思ひ出し　津山　同　藤田　天風
新聞に今日も戰果が書ききれず　津山　同　中山　陽山
留守といふ手も會得した妻になり　大牟田　同　濱田　國夫
汽車の客戸を開けたまゝ逃げるもの　津山　同　二宗　吟平
聖戰の廣さ祖母さん呑み込めず　大阪　同　中西　彌生
枕かたく老兵夢をたのしめり　滿洲　同　渡邊　曉童
零下〇〇度ピアノの音は凍てをるか　朝鮮　同　松田　幸士
陥落のニュースへ病父身を起し　大阪　同　永田六龍子
有難い父母の便りも燒いて征く　滿洲　同　西垣　錦風
海の色だけは變らぬ世界地圖　大阪　同　山田靑々子

病床にて

九度二分の線の赤さの毒々し　松本　同　岩井　汗靑

★寺井鋭々氏（赤倉より）有恒クラブ、スキー部一行として當地に來てゐます。二十數名の大部隊です。三月一日の一日だけはカンカン照りの好日和でしたが昨日も今日も吹雪です。それでも昨日は三キロほどの練習ツアー。今日は猛吹雪の中で猛訓練といふ身心鍛錬振りです。それがお嬢サン達を除けば三十、四十、五十代の實業家連中だから何と愉快な事です。明日は素晴らしいです。當地を出發、油の平、好高へスキーツアーで歸途に就くつもりです。（三月三日夜）—路郎宛—

★田邊田布氏（奈良より）日本一の新緑には未だ早いですが、古事記の撰上千二國三十年祭もあり、春日神社の申祭でもあり、鳥居の國寶になつたのも見たほしたく、またやつて來ました。（三月十三日）—葭乃宛—

御入院は需めに應ず

醫學博士　谷内興一郎

谷内小兒科病院

大阪市港區市岡元町一丁目（道頓堀電車）

電話　西四〇四八　一七三八番

初等川柳講座（三）

川柳を作るのにどんな道具が要るか

麻生路郎

たとへばヴアオリンをはじめるとすれば、ヴアイオリンは勿論のこと、音譜や音譜を載せる譜面臺や、松脂や絃が要るでせう。其の外、調子笛やメトロノームや弱音器なども要るでせう。ところが川柳をはじめるのにはそうした道具を買ひあつめる必要はありません。強いて道具として數へれば句帖一冊と鉛筆が一本あればいゝのです。それも有合せでいゝのでわざ〳〵買ひ求める必要はありません。句帖がなければ紙片でも用は足りますが、自分の作句の足どりを見るためには紙片では散逸のおそれがありますから、どんな手帖でもいゝから、句帖として一冊は持つてゐる必要があります。

手帖と鉛筆はひとりで作句する時にも必要ですが、句會や吟行に出かける時にも矢張り必要です。句會案内などによく鉛筆御持參などと注意がきがしてありますが、たとへそうした注意がなくとも、句會に出席したり、吟行に參加する場合には必ず、手帖や鉛筆は持參しなければならないのです。

俳句などでは「歳時記」とか「季寄せ」とか云つて、課題が春夏秋冬の何れに屬してゐるかといふこと、その課題の内容はどんなものであるかどんな例句があるかといふことを簡單に知るために、季題を字引のやうに編纂してある書物を常に懐ろにしてゐて、課題が出ると初心者は先づこの「季寄せ」と首つ引きをして作句いたしますが、川柳は課題吟を作る場合森羅萬象がみな課題となるので、そうした「季寄せ」に頼つて作句するといふことはないのであります。では川柳にはそうしたものはないかと申しますと、全然ないこともありませんが、川柳の歳時記は俳句の歳時記を眞似て分類したのに過ぎないので、作句の參考として絶えず携帶してゐるものではありません。形こそ似てゐるが、使用目的は同じではありません。又、歳時記とは別に句を類題別に編纂した書物などもありますが、これとても作句には一切不必要なのであります。そんなものをのぞいて、摸倣句を作ることは害こそあれ、利益はないのです。ただ自分の苦心の作に類句がありはせぬかといふことをたしかめるのに便利な位のものです。句の觀賞には類題別によらなくても雜誌や句集が幾らもあるからです。

むしろ、そうしたよりかかるやうなものを考へないで、素手で、素ッ裸で、句を作る方が、その人の力を早く、しかも素直に發揮させることが出來ます。

右に述べましたやうに、川柳を作るのには殆んど道具らしい道具は要らず、僅に手帖と鉛筆さへあればいつからでも簡單に入門が出來るのであります。しかし道具が要らぬといふことが、或る人にはかへつて、とつつき悪く思はせたり、雜作のないもののやうに思はせたりするやうでもあります。

では手帖と鉛筆の外に道具は一切要らぬのかと云へば、手帖や鉛筆のやうな道具は要らぬが、川柳を作るためには、手帖や鉛筆よりも、もつと〳〵重要な道具が要るのであります。

それは單語です。單語と單語を繋ぐ助詞です。單語の集積した齣です。言葉です。あらゆる事物をあらはすのに、それに尤も適當な表現をする本辭、尤も適當な助辭を知らなくては、すぐれた川柳は出來ないのであります。

つまり、前に述べた手帖や鉛筆のやうな道具は家を建てるための鑿や鉋や鋸でありますが、あとの道具は家を建てるための材木や、壁土や、疊や建具などに類するのであります。

そしてどんな家を建てるかは作者の心構えによつて違つ

てまゐります。純日本式の建築が好きであれば純日本式、洋式が好きであれば洋式、和洋折衷が好きであれば和洋折衷、古典にのつとつた樣式であらうとモダン味の樣式であらうと、そのスタイルは作者の嗜好や個性の趣くところによつてそれ〳〵のかたちとなつてあらはれてくるのです。

從つて、單語は主として現代の日本語でありますが、作者の思想や嗜好によつてはあらゆる單語をとりいれて差支ないのであります。外國語であらうと、古語であらうと俗語であらうと、專門語であらうと、その材料を不自然でないやうに巧みに組立てて、よき內容を持つ川柳を生み出しさへすればいゝのでありますがどんな單語をどう組合はせれば自分の考えてゐるやうな句になるかといふことはなか〳〵難しい問題です。

ぶさいくに組立てても案外頑丈な家もあれば、いかにも見てくれのいゝ家でも、一寸した風にすぐへたばつてしまう家もあります。

これは全く家を建てる人の頭の如何にあるので、家を建てるのに適しない人であればいくらすぐれた材料を與へても、いゝ家を建てることは出來ないものです。川柳を作る人にも、そうした素質を全く缺いだ人があります。最高の學府を出てゐても素質がないので、一句も出來ない人もあります。しかし、川柳がどうしても作れないといふ方はホントに稀であつて、一寸作つて見て、すぐに匙を投げる人が多いのではないかと思はれます。と云うのは器用な作家よりも、鈍重な作家の方にかへつて、優秀な作品を遺して行くことの多いのを思へばある程度のガン張りが、その作家の心の底にある川柳のよい鑛脈を掘り當てるのではないかと思ひます。

單語について、も少し繰返へして云へば、家を建てるのに、いゝ材料さへ搔き集めてくればいゝ家が建つといふ誤謬に陷ることであります。

なるほど材料は選らまなければなりませんが、いゝ材料を集めて來たからと云つて、必ずしもいゝ家が建つには限らないといふことを認識する必要があります。いゝ材料でいゝ家が建つことはあつても、建たない場合が多いのであります。いゝ材料と云つても、それは單にバラ〳〵なもので、材木は材木であり、壁土は壁土であり、建具は建具なのであります。どんなにいゝ材木であらうとも、材木が家ではありません。どんなにいゝ壁土であつても、壁土が家ではありません。建具も同樣であります。從つて、それ等の材料の組み立てと調和の如何によつていゝ家が建つのであります。

單語もこれと同じで、いくら洒落れた單語であらうとも絢爛な美辭であらうとも、それ自體が、句となるのでなく他の單語や助詞との巧みな組立てによる調和によつて全く別箇の新らしい內容が生れて來るのでありますから、單語そのものの腐心によつてすぐれた句が生れるのだと早合點をしないことであります。

そうした誤謬を文字に囚へられると云ひます。所謂文字に囚へられた句は作者の自惚は別として句の內容はからつぽなのであります。それでは句としての迫眞力がありません。單に單語だけではなく、一つの齣に陶醉して、何處へでも、その齣を用ひる作家がありますが、斯うなると內容はいよ〳〵貧弱なものとなります。少しく句が作れるやうになつた時に陷り易いので、特に心すべきであります。要するに、單語は何處までも句の道具に過ぎないことを忘れてはならないのであります。そしてその道具はその人の素質を充分に發揮させることによつて、一句の中にとけ込んでゆき、道具としての存在が消滅するものなのであります。つまり川柳を作るためには上述の二種類の道具が要る譯でありますが、後者は前者のやうに簡單に準備することが出來ないので、別講に於て更に詳說することにいたします。こゝでは單にそうした道具に苦心しなければいゝ句は出來ないのであるといふことだけを知つていただけばいゝのです。

川柳 世界史

（XII）

戸田孤篷

（十五）宋史

宋の興隆

唐の家臺骨が地に墜ちるとそれッと云ふので北の方から手傳ふ連中もあらはれて後梁後唐、後晉、後漢、後周と矢繼早やに國が起り國が滅びる。馮道と云ふこの五代十一君に歷任した心臟の强い男の名が歷史に殘つてゐる。强國遼の壓力が北から加はる。之を討伐に赴いた後周の名將趙匡胤（キョウイン）への衆望が寢込みを襲はせ天子の黃袍をきせさせる。之が宋。國內統一にエネルギーを遣ひすぎて對外的にはどうかと思ふ記錄の連續。併し「臣に論語一部あり、半部を以て太祖を佐け天下を定め、半部を以て陛下を佐けて太平を致さん」と叫ぶ名臣、かつては無學のそしりを受けてゐたと云ふ趙普が御臺所に頑張る。

御寢卷の裾を黃袍の裾に見せ
一匹の蚊をもてあます程肥り
御寮さん垢切れに馴れ列に馴れ

王安石の新法

青史に宋の名が殘る以上骨無しばかりが揃つてゐたのではない。大に富國强兵を論ずる王安石が安石出でずんばと現はれる。

百姓に金を貸して利子をとる靑苗法。身代金徵收と失業救濟の一石二鳥をねらつた募役法。賣れ殘りで儲けようと云ふ市易法。長距離運送をさけて有無相通じさす均輸法。以上富國策。屯田兵の保甲、屯田馬の保馬、この二つが强兵策。

人間の作つた政策。運用するものが神の心なれば正善となり、凡人以下なればたちまち邪惡となる。うまくいつてあたりまへ、まごつくと出しやばり奴と打たれるのが出る杭の習ひ。新法は皇帝の代がかはる度に有馬筆の如く出たりひつこんだりして、宋家を滅す遠因を作る。

自ら繪をよくする徽宗は奢侈に流れ、北方でも金が遂にかはる。

合理化と兎に角書いて考へる
王安石自分の我にもちとあきれ
効く効かぬうちに病人死んでゐる
皇帝の落款少し大きすぎ
徽宗帝苞（パオ）の內でも描かされる

南宋

北半を取られてよんどころなく南に移つて小さく生きる宋。そこに秦檜と岳飛があらはれて、片や軟弱、片や强硬の名コンビ、祖父の徽宗と父の欽宗を夷敵にさらはれた氣の弱い高宗をはら〳〵させる。盡忠報國と背中一つばい入墨をした無敵將軍は味方の孱腰共に殺され、その反對派の張本人秦檜夫婦の裸像の奧津城が鎖に縛られたまゝ岳飛のと仲惡く並んでゐる。

盡忠報國少しは背の垢も吸ひ
鐵鎖（てつさ）もつて岳飛を拜みに來

宋代の文化

（儒教）人材登庸の宋代は貴族主義より民衆主義へ。儒教も佛教道教の長をとり哲學的傾向を帶びる。

喰はず嫌ひ棄てゝ海鼠（なまこ）の味を知る

太極圖說をかゝげて五行を語る周敦頤は無欲をすゝめ程顥之をつぎ弟の程頤は陰陽を理氣におきかへ涵養と進學により聖に至ると云ふ。

みな無欲段々人間小さうなり
一升樹の型にはまれば甲の上

お次は精神一統何事かならざらんの朱熹。

床の間に雨の穿（うが）つた石を据え
光陰を惜めば楷書など書けず
ヒビ入りの道心持つて凡に居る
聖人の御顏も鼻が一つなり

この個々の理を窮めるを以て滿足する御墨附きの學派に反對したのが一切の客觀は主觀の反映と唱ふる陸象山。

剖ちわれはおれのお腹（なか）にある宇宙

（文學）活字の發明、散文への復歸、評論の流行。

初版まず仁宗帝に上る（たてまつる）
押韻と云ふごまかしの手も見つけ
支那音で聽けば惚れ惚れしたけれど

王安石の反對派歐陽修、左遷されて醉翁と號す。作文の極意、多讀、多作、多考の三多創作推考の最良の場所として馬上、枕上、厠上の三上を發表した。

厠から歸ると醉翁筆をとり

北宋に三蘇あり、老を蘇洵、大を蘇軾、小を蘇轍。科擧試驗に落第して役人になりそこなつた老蘇は旣往の作品を灰燼に附して奮發一番筆鋒鋭利な議論文を作る。蘇東坡の名で有名な大蘇は赤壁の賦をはじめ蛸八で何んでもいける大作家。小蘇も父や兄に負けない犀利の筆を以つて知らる。ともに歐陽修の門。

集み上げて燒けば草紙は舞ひ上り
春宵一刻うつら〳〵と風邪を引く
曹操の御座のあたりで酒が切れ

黃庭堅は北宋の詩人。王安石は拗相公といはれる片意地も

の。筆端はあまりにも頭技奇峭。司馬公の司馬温公(誤正=第二一二號(一六年九月號)二五頁漢文化三行目司馬温公は司馬遷の相違。從つてそれに續く句「救はれた子供も史記をほめにくる」は削除)は政治の虎の卷資治通鑑を著す

安石像ふと白石を思ひ出し
直諫も少しふくめて書き上げる

(美術工藝)徽宗皇帝自らが筆をとつた程で藝術家は優遇された。山水畫にニジマセ法とでも云ふ米點法があらはれ南畫の極地を開き、日本人にも親まれる牧谿など現れる。茶道が起つたのもこの時代。間もなく禪宗とゝもに日本に輸入される。

新技法亦にじませた反古の山
千金の茶腕とともに茶がとゞき

(十六)元史

蒙古の勃興

成吉思汗は義經なりと云ふ傳說の眞僞は暫く置くも、鐵木眞後の成吉思汗の父エスガイは義經の父義朝の樣な死方をしてゐる。

萬難苦節蒙古の大汗(首長)の位をかちえるまでの彼の生活記錄は涙と今に見ろの負けじ魂で貫れてゐた。

義經記の續き鐵木眞引受ける
偉らすぎた父を恨んだ日の日記

蒙古の版圖

大東亞戰爭完遂の曉には全地球をおほふ八紘一宇を顯現するであらうからそれには遠く及ばないにしても元—蒙古の色に塗られた土は日本海、支那海の岸から遠くシベリヤアフガニスタン、イラン、トルコを經て中央ヨーロッパのハンガリー、オーストリヤ、ボスニヤにまで及び、彼の爪牙からまぬがれたものは西ヨーロッパ、エジプト、印度それから日本だけであつた。

成吉思汗寢所の壁に征服圖
コルトヴアの注問西蒙辭典など

(註)コルトヴアー=中世歐洲暗黑時代にスペイン南部にある唯一つの文化の中心回教徒人の都

壇の浦の悲劇を眞似たわけでなし

(註)南宋元に滅ざる

元寇

傳說を固執する人達は蒙古の王憲に日本を「不征國」としてゐたと云ふ。調子に乘つた元主世祖忽比烈は何の日本位と朝飯前にかゝつたのはよいが再度神の怒りにふれ、自分で咬んだ臍の傷がもとで再起出來ない床に伏す。

屑籠へそのまゝ國書ほりこまれ
神風を信じ國書を破り棄て
王憲を破つた事に氣がつかず

元の末路

日本に臍を、窮鼠の漢人に手足を咬まれ、喇嘛の惡疾に腦を犯された大男の元は案外もろくまいつてしまふ。

漢人は元の末路に錢を賭け

元代の文化

虐げられた人達は皮肉を覺え、狂句を作る(川柳は狂句ではない)。せめてもの憂さを漢人は戲曲戲文に晴らし、西廂記を水滸傳を三國志を產む。

漢文の論語は背を向けて聽き
水滸傳「元」は阿片と知らず褒め

一合一本

「川柳雜誌」の合本並びにバックナンバーを御希望の方は大至急御註文下さい。「川柳雜誌」菊版時代の合本では三卷、四卷、五卷六卷、七卷、八卷、九卷、十卷、十二卷、十三卷、十四卷がありますが(定價各三圓、送料三〇錢)振替大阪七五〇五〇(川柳雜誌社)を利用して下さい。

慰問袋を

戰線の勇士へ

つゝ喜ばる

大鐵百貨店

春宵雑談

麻須生
莨崎豆
乃秋

＝川柳塔＝

儲けると云ふは昔の語り草　（翠光）

莨乃＝儲けると云ふやうなことは舊體制のことであつて今の時勢に通用せぬ言葉で、全くそれは昔の夢である――と云ふ内容だけで、一億國民が誰しも承知してゐて、一向珍しい題材でないけれど、句として生きてゐるのは「昔の語り草」と云ふ言葉を使つてあるからだと思ふ。斯ういふ風に句材としては平凡であつても、表現方法で生きてゐる句が往々にあります。これから見ても内容の肝腎なことは勿論ですけれども、叙法の研究といふ事も一層大切だと思ひます。此の句は儲けると云ふことに重點を置いてゐますけれど、豆秋さんの「むかしむかし稼げば樂になりしとか」を今ちよつと思ひ出しましたがこの句は無事に生きてゆくと云ふ事に重點を置いた句です。これには例の「稼ぐに追ひつく貧乏なし」と云ふ俚諺が匿されてゐて面白いと思ひます。その「稼ぐに追ひつく貧乏なし」といふ言葉を生の儘で句の上に、ちよつとでも頭を持ち出したら平凡で面白くない句になるところでしたが、流石に手際が良いと思つて感心してゐます。

＝近作柳樽＝

啄木の涙を蟹も持てあまし　（經峰）

豆秋＝諺を引用した先の句で思ひ出しましたが、これは……「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹と戯る」ですか、この歌を題材として巧く、面白く創られてゐると思ひます。そこで、今の翠光さんの句にかへりますが、此の句は統制經濟と云ふやうな硬い内容を表現技巧によつて巧くこなしてをります。實際現在では經濟に限らず、川柳の内容も確かに統制せられ、謂はゞ統制川柳となつてゐるので……統制川柳なんてあるかしら。（微笑）が、兎に角さうした中で、硬い、堅くるしい題材を生かすのに一段と技巧の工夫が要るやうに思ひます。これ、然しやんわりと巧いこと云つてますネ。

＝川柳塔＝

四分ノ一八分ノ一に切るのを子等みつめ　（琴）

莨乃＝此の句を讀んで、私面白くつて仕方ないのですが

豆秋＝はゝ、さうですネ……。「四分ノ一八分ノ一」か段々小さうなつてゆきよる。

莨乃＝此の句もネ、配給のお菓子？を……切るところを見ると羊羹かなにかを、お母さんは如何に陳平主義に分けてくれるかを、瞳を光らせて見てゐる子供らの無邪氣さが見えて頗笑ましい句です。子供と云ふものは、こんなものでいつか北京の東魚さんが「他所からお菓子でも貰つて御佛前へ供へて置くと、子供達は未だそれが下らぬ裡から、おツ母さんに交渉にゆくんですよ」と云はれた話を思ひ出します。此のお菓子も分けられてから後で、兄さんの方が三分ほど大きいとか、なんとか云つて揉めるのではないでせうか。……それからまだ私琴さんの句で

もう一度來る氣の外交笑つとき　（琴）

これ一體どんな場合を想像されますかしら…

豆秋＝これは日が悪かつたんでせうな、保險屋ですか、なんか、こりやも一邊來にやいかんと思つて引き揚げたんでせうなア。

莨乃＝あつさりネ。

豆秋＝はあ一寸空氣が悪いんで、なんでせうな……（無言）さて「四分ノ一八分ノ一」ですネ、この句は敍法として川柳らしい川柳でなく、川柳の制服制帽は着けてをらぬが「四分ノ一八分ノ一」と疊みかけて、それを見つめてゐる子供の瞳の色が變つてゆく情景を見るやうな氣がします。こんなのを川柳の眞表現法とでも云うのでせうか。

莨乃＝それで又、外交員の句ですがネ、日が悪いから出直すといふ氣になつた事は豆秋さんの云はれたとほりですが、さういふ氣になるまでに餘ッぽど、えげつない癇に障はるやうなことを云はれたのに違ひないと思ひます。と云ふのは、「笑つとき」と云ふ言葉に、むかつくのを凝つと堪へた外交員の惱みが能く出てゐると思ふのです。

莨乃＝一笑氏も嘘の句を創らぬ人です。机の前で首を捻つた句は見られません。あまり古い作家ではありませんが作句態度や、その素質は良いと思ひます。今月の句も、みんな體驗の句許りでせう。

豆秋＝文字の使ひこなし方も餘程愼重で、漢字で書く可きところ當を得てをり、字の使ひ方に敏感な所が見うけられます。

莨乃＝作家は、穿ち專門の作家、感じの句專門の作家と大體に於て分れてくるものですが、この人はどちらもゆけます。役者で言へば、立役も女形も、二枚目も三枚目もやれる、謂はば延雀のやうな人でせう。嘗て、本誌の月評に上つた「空地利用あれ／＼みんなとうがたち」や「月見草時報の鐘がきこえます」の句なども自然をよく川柳化してます。今月の作品でも、

＝川柳塔＝

見送りの一人さつまの守をきめ　（一笑）

の句と、最初の二句ではすつかり句の柄が違つてゐます。

豆秋＝先月號にこの人の「春の泥牛のわらじがぬいであり」と云ふ句がありました

が、このやうな、ものやはらかい詩感を持つ句でも創りこなせるのは本當に延雀のやうな人です。が將來器用倒れしないやうに精進されたならば必ず伸びる素質を持つてをり、大成する作家だと思ひます。

＝川柳塔＝

何を喰ふ鳩か本願寺に遊ぶ　（玲之介）

馥乃＝いつたい鳩は何を喰うてゐるのかと云ふ感じの起るのも尤もです。鶏でも始終餌を漁つてゐるけれども、鳩の方がもつと頻繁に何かを拾うて食べてゐるやうに見える。このあひだ、鳥の歩き方を凝つと見てゐたのですが、右足を出せば首を前へ伸ばし左足を出せば又首を前にのばし、左右の足が替はるがはる前へ出るたびに首がピョツピョツと伸びるのです。あれは怎ういふ理由かと考へてゐるのですが、未に判りません。……話が妙なことになつて了ひましたが一寸道で考たことを喋つて見たのです。で、この句も時局を詠んでゐるのに何處か餘裕のあるのんびりさを感じます。

豆秋＝實際何を喰べてゐるんでせうか、天王寺さんだと豆の配給で暮らしてゐる事が誰にも判りますが、あのお婆さんが毎日賣つてをる豆の量も大したものでせう。

＝川柳塔＝

半皮を打つて靴屋と話しこみ　（鮎美）

豆秋＝春の陽を背中にうけて靴屋と話し込んでゐる親しみのある雰圍氣を此の句から受けとります。もし間違つて此句を川柳漫畫にでも畫かれたならば、此の句が泣いてしまひます。川柳漫畫がよく、立派な句を慘殺してゐるのに對して、なんとか抗議を持ち込むわけにはいかんものでせうか。

馥乃＝けれど靴屋さんも好い仕事ですネ、兎に角背中に陽を浴びて、手さへ動してをれば商賣になるのやから…。斯ういふ路傍で仕事をしてゐる人を見ると、デイオゲエネスのことを思ひ出します。王さんが彼に向つて、「なんでも望みの物をとらせるから云つて見よ」、と云はれた時に「私は何も欲しい物はありません、どうぞ日向ぼこの邪魔にならないやうに其處を退いて下さい」と答へたことを思ひ出して、無慾な姿で働いてゐるやうにも思へるのです。

豆秋＝漫畫のことに就いて考へたのですが、此の句の中に内藏してゐる長閑な氣分は一層寫眞にして、背景とか光線などに據る方が活きて來るのではないでせうか。そこで本誌上で寫眞を川柳にしてゐる裏をいつて川柳を寫眞にする、所謂川柳寫眞といふものを提唱してみたいです。

馥乃＝この話し込んでる人は何ういう人でせう。あんまり忙しくない人ですネ。

豆秋＝あ、そうですネ、さうか畫休み……畫休みを利用したんですネ。と同時に自分の會社の前に何時も頑張つて居る馴染をもつた靴屋と思ひます。

馥乃＝なにか靴の穿き替えが無い人のやうにも思ひますネ…（笑）なんとなく句全體からそんな感じもしますが…

豆秋＝で、話の筋も革の統制と云つたやうな…

＝近作柳樽＝

カタムケ積御斷りとヒヨコ御渡滿　（鶏城）

豆秋＝運送屋の通用語に「天地無用」と云ふ言葉がありますが、巧いことを云つてあると思ひます。それを又、川柳家は「カタムケ積御斷り」と運送屋以上に巧い言葉を見付けたものです。

馥乃＝「カタムケ積御斷り」と云ふのは初めて聞いた言葉ですけど、この人が使つてゐられるから運送屋の用語ではないのでせうか。それは私には判りませんが「ワレモノ注意」等の札と異つて、逆さまにでも置けば内側で嘗しいから直ぐ運送屋の方でも氣付くでせう。兎に角、自分の畠のものを句にすると巧くこなせますネ。次に、同じ鶏城さんの句で「產んだ聲今日の役目はすんだ聲」は一寸前書が無いと判らぬやうに思ひますが……

豆秋＝鶏城さんは養鶏をなさつてるのですか。

馥乃＝種鶏場の仕事です。

豆秋＝ははア成程ネ、鶏城さんの職業を知つてゐる者には前書抜きでも直感的に鶏の產み聲だと判りますが、知らない人にとつては前書が要るわけです。然し「今日の役目」と云ふ以上、人間の產聲でないと云ふことが判然してゐるやうです。やはり餅は餅屋とでも云ひますか、その職業の句は他の側の人の想像では到底創れません。萬よしが上燗の句をよく詠んでゐたし、奥さんの當時の句に「客にあはすレベルピアノのキーの如」などが思ひ出されます。職業と川柳の例、まだ外にありませんか…

馥乃＝各地柳壇の欄を見てゐましても廣島支部や下關支部の方々は鐵道に關する句が特に巧いですなア…

豆秋＝あ、まだあります。かほるさんの句に「菊の露口三味線で溶けてゆく」といふのが……、菊の露と云ふのはかほるさんとこで製造してゐられる丸い飴のことです。

馥乃＝それから、たけをさんの句に「往診はこんな梯子をのぼらされ」がありました。然し斯うして職業から句材を拾ふ場合、作句者自身には、あまりに慣れた事柄であるため大した發見でないと思はれて、そのまゝ埋つてしまふ場合が、かなりあるやうに考へるのです。で、さうした句は決して自選をしないで選者に送られるといふことも、よい方法だと思ひます。

豆秋＝さうです。殊に近頃軍需工場などに働いてをられる產業戰士の力强い句が、ぼつ〳〵出てるのを見うけますが此の方面の句も、ます〳〵澤山にあらはれることを期待致します。

（アート筆記）

『火龍南に進む』

（詩）

山本耕一路

あゝ　燦たり
雄々たり
シ港の土　今こそ
つはものらは踏む
思ひ見よ
コタバル上陸來七十有五日
「シ島の土踏ますんば斷じて斃れず」と
このたゆまなき磐石の意志
この噴きいづむ敢闘の氣魄
つはものら　心に刻み　肝に徹した
前進隊と後續隊は默々と巨大な鎖に變じ一塊の焰と化した
おゝ見えざる世紀の火龍！
つはものら　そが　金玉の眼球となり百獸を睨殺した
つはものら　そが　鐵爪となり　沼を裂き　川を堰いた
つはものら　そが尾端の劍となり團々たる密林の大濤を縱につんざいた
つはものら　そが　紫紺の

隨想

丹波の狐（二）

小山文三

明治四十年頃日本へ來朝したアメリカの御札博士として有名なスタール博士の說に因れば日本の稻荷さんのある處には必ず其近傍に觀音さんが祭つてあつて、之れも陰陽に因んだものだと其行脚記に書き殘してゐるが、丹波のお稻荷さんにも其近傍に大てい觀音さんが祭つてあるから面白い。

○

閑話休題、さて狐は人を魅すと言ひ傳へられ又稻荷さんのお使ひだと謂ふ處から、昔の丹波の獵師は之を打つのを躊躇したものであつたが其毛皮が敷物となり襟卷として珍重せらるゝに及んで漸く捕獲し初めたのである。

鷄舍を襲ふ狐には係蹄を掛けて捕るのが普通であるし、獵師の目星を付けた狐の穴では其穴の入口で火を焚いてキツイ煙を穴の中へ煽入れて、其逃げ出る處を素早く打つのであるが、之れが中々一發必中とは言へなくて、餘程の熟練と氣合が要るのであつて、昔の老練な狩人から聞いた手柄話なぞ、書いてゐては際限がないのである。

○

凡四十年の昔、筆者の生家に彌助と云ふ下男が居た。いつも夜遊びに出るのを常としてゐたのに、其日の夜は神妙に我家の爐盧裏の焚火の前で夜なべの繩綯ひなぞしてゐて家族の者から打つて變つた神妙ぶりを冷笑かされなぞしてゐたが、突然裏山の稻荷さんの石段下あたりでバーンと異樣な爆發の音がした。

此物音に家族はヒドク驚かされたのであつたが、元氣な彌助は一向騷がず直ぐ戸外に駈け出したが、間もなく血汐にまみれた一匹の狐をブラ下げて入つて來た。

そして今宵自分の掛けて置いたダイナマイトにうまく此狐が引ツ懸つたのだと手柄らしく、語るのであつた。

其頃丹波の石割りに使つた爆藥を貰つて來て之れを油揚げにくるんで、此お稻荷さんの石段に置いて置いたのだと自慢するのであつた。

こんな風に山野の狐の出そ

○

狐は俗に稻荷さんのつかはしめだと傳へられてゐる事は恰も八幡さんの鳩の如くである。實にどこのお稻荷さんに參詣しても必ず石彫りや、練り物の狐が献ぜられてあり、中には卷物を銜へたのや、如意寶珠を銜へたのがある。

筆者の生家は山際にあつて家の後ろは細い道一つを隔てゝ直ぐ山に接してゐる。そして此山には堂ノ尾稻荷社と謂ふのが祀られてあつた。

初午の稻荷祭には赤幟りが建つたし、太鼓も鳴つた。村の子供達は赤紙や黃色い紙や青い紙なぞを繼ぎ合せて小さな紙幟を造り、之れに自分で正一位稻荷大明神と、覺束ない文字を書いて献じたものであるが、村ではめい〳〵に赤飯を煮いて之れを藁苞に入れ油揚げなぞを添へて持ち參り其神殿の裏床下にあけてある丸い穴の中へ供へるのであつた。

そして狐が此穴へ入つて食ふのであると敎へられたのを記憶する。

畢竟稻荷さんと其つかはしめの狐とを混同して狐即ち稻荷さんと心得て居たものであろう。

○

お稻荷さんは五穀の神として倉稻魂神を祀つたものだと聞いてゐるが筆者の生國では藺の形をした白團子を山躑躅の多岐な枝に挿したのをこしらへて供へたり、お庭の砂を貰つて來たりして養蠶の豐穫を祈つたり行商人が商賣繁昌を祈つたりしてゐたのみならず、凡四五十年前までは徵兵除けのけしからぬ稻荷さんがあつたりしたのを思ひ出すのである。

鱗となり　めらめらと射る
　灼熱の陽を　彼方へ遠く
撥ね返へした
おゝ　この壯凄なる火龍の
舞こそ
吾等が血兄弟　前進の姿だ
不逞の輩
見よ　今こそ
左肢の鐵爪　巖としてシ港
を扼さへ
餘す鐵爪は　火焔を呼んで
ジヤバ・濠洲に懸かる
あゝ　燦たり
壯々たり
吾等がもののふの進撃は
かく縷き
かく發く

——二月十五日シンガポール陥落に寄せて——

新會員を募る

松坂倶樂部川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作つてけるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。（川柳講座幹事）

うな場所に爆藥を仕掛けて捕獲する事もあつたが、其後爆藥取締法が出てからは許されない事になつてしまつたのである。

○

昔から丹波では狐のために隨分頻繁に家畜類を襲はれたものと見えて、狐を防ぐ幾多の行事が至る處に種々の形に於て殘つて居るが其内狐がへり（狐狩りの轉訛）と言ふのが有名であるから茲に紹介しよう。

私の鄕土では正月十四日の夜更け即ち正月十五日の午前の時に左義長を焚く。此トンドは村から本街道に通ずる田圃道の村外れに建てられる。此村の左義長は近鄕に稀に見る大掛りなもので、先づ中央に太さ一尺、高さ二丈位の葉のついた儘の大きな竹を一本建てる。之れを中心として約五坪位の地面の周圍に松の木や小竹を建てゝ小さい森の樣なものを作る。而も此松や竹は、產土の神や、村の諸々の神樣に立てた正月の門松を以てするのである。

斯くて之れが建ち終る頃から村の人達はメイ〳〵に自分の家の門松や神棚を飾つた、松飾りや、〆縄等を、こゝに運んで、小さい森の中に一杯につめ込むのである。

松飾りや門松を此左義長に持ち込む時にはメイ〳〵の家から、ツツオ團子（屑米で造つた團子）を持つて來てトンドの神に供へるのも異色ある風習である。

○

斯くて其日も暮れて夜半、將に正月十五日に移らんとする頃、產土神の祭事を司る御當番八人が打揃つて神社に參詣し、各其携へたる火縄に御神火を受けるのである。

御神火を受けた御當番は、火縄を振りつゝ、宮の奥の山道の四ツ辻や村の道のあちらこちらの四ツ角に、小さな御幣を建てゝ廻り、次で打ち連れて河上に當る隣村の境迄行つて、こゝに兼て用意の氏神さんの御守札をつけた竹竿を打ち立て、村中の五穀成就と息災延命を祈願するのである。村の中央から隣村境迄は山裾道乍ら凡十一二町内外もある事であらう。

祈願を終つた八人は此村界の地點から一齊にスタートを切つて、携へた火縄を高く打ち振りつゝ、我れ先にと駈け出して十數町を隔つる左義長の處まで、今で言ふマラソン競爭をやるのである。一方、頃合ひを見計つて村人達ちは左義長を圍んで群集し、遙か山裾道を駈け戻る火縄の火を見守つてゐるのである。そして其トップを切る火縄の走者こそ我身内の者なれかしと片唾を呑んで待つのである。

八つの火縄は靜かな夜道に聞く、高く、大き輪を畫いて近づいて來る。群衆は拍手と聲援を送つて熱狂するのである

斯くて第一着の走者の火縄の火を以て此左義長に點火される。即ち第一着の選士を遇するに、左義長に點火する榮譽を與ふるのである。

○

左義長に關聯する丹波特有の行事と舊慣を述ぶれば誠に興味津々たるものがあるが多いが何れ別に稿を新にする事としたい。

兎も角此八人の火縄の駈足競走は、狐の尻尾の火の玉の說や、八ツ尾の狐なぞに想を構へた行事であつて狐の及ぼす農作物の被害を此行事に因つて幾分でも免れん事を祈つた神事に外ならぬのであると思はれる。

狐の内でも王者ともなれば八つの尻尾を持ち、而も各其尻尾の先には火の玉がついて輝いて居ると言ひ傳へられるから、此狐狩りの行事も惡戲をする野狐共を王者の狐が出て追つ拂つて行く有樣を型取つたものだろうとの說もあるが考證十分ではない。

柳川に ふ拾をまう

★

鹿石木鈴

馬

ほんとの馬でない馬の幾つかを擧げる。(1)お馬さん、(2)遊女の異名、(3)月經等ある。

(1)馬になる頭粱奥に受けがよし　琴人

(2)馬はもう開きめさいと仲人いひ　古句

(3)淋病と號して馬に乘りたがり　同

駒

駒にも(1)馬、(2)三味線の駒、(3)將棋の駒とある。

駒のかしらも見えぬ程松をつけ　古句

しのび駒こまかに唄を彈て居　同

そばの客將棋の駒で數を取り　同

木馬

武家の練習用の木馬から、現在の玩具の木馬といろ〳〵ある。

木馬の側にかゝみ見てゐる　古句

附添に威張つて見せる木馬館　雨月

竹馬

少年時代がなつかしいが近頃は見受けなくなつた。

竹馬は塀の上から友を呼び　メ丸

繪馬

最初は神馬を奉納する代りであつたが、後には馬の繪でないものをも總稱して繪馬と呼ぶに至つた。

九郎介へ代句だらけの繪馬をあげ　古句

繪馬堂で分らぬ同志論じ合ひ　文庫

神無月かまどの繪馬も閑古鳥　古句

左り馬

三味線に書かれる左馬であるが、

張替る代を取られる左り馬　紅太郎

精靈の馬

お精靈さんの茄子で、胡瓜は牛と云はれてゐた。今は牛をも馬と呼んでゐる。

鴨燒をのがれ佛の馬になり　古句

灯やうすき胡瓜の馬や茄子の馬　三太郎

尻馬

獨立性のない連中だ。

妾が兄尻馬は扨上手なり　古句

馬の骨

牛の骨でもいゝわけだが、

傾城は毎晩馬の骨と寢る　古句

美くしさ素性はどこの馬の骨　劉花坊

橙舎 く逝

▼「一本のテープ」の名吟で、あまねく知られてゐた醫學博士小林橙舎氏が三月九日午前八時過ぎ急診の途南海山手線上之芝の踏切で不慮の輪禍により長逝せられたことは寔に痛惜に堪えない。行年四十五歳、法名は楠齋院正道仁義士。

▼小林正義氏は明治三十一年十二月卅日出生、大正十三年三月廿五日大阪醫科大學を卒業後、阪大病院に勤務、昭和八年五月五日醫學博士の學位を授與され、昭和九年大阪帝國大學醫學部の附屬病院を退職、財團法人飛田病院長に轉じ、昭和十五年退職とともに上の芝で開業、名聲嘖々たるものがあつた。

▼氏は資性寡默であるが叡智に富み不斷の努力家であつた。川柳に又精進を續けられた、阪大川柳會の一員として既に十有餘年になる。その佳吟名句は阪大川柳集「大川端」に掲げられてある。昭和十五年二月から不朽洞會員に推され名作家として曹く知られてゐる。

▼左に「大川端」及び其の後の作品から一部を採錄し氏の風格を偲ぶよすがとする。

橙舎句抄

一本の外はどうでも良いテープ

トロツトの足のさばきも春なれや

新聞に話ついたと出て呉れず

千代紙の着物着せ度い乙女なる

心だけはあなたのものと書いて置き

水溺避けて行く樣な靴でなし

感情の激する端に髮がある

盗まれてから贋物と判つて來

官能の表皮か浴衣疲れたる

馬の足

舞臺とは別に川柳では花形役者だ。

据風呂を焚きかけ馬の脚に出る 古句

江戸の馬田舎芝居で人に成り 同

馬の脚馬にならねば投げられる 縦想樓

適材を適所に馬の足になり 啞人

附け馬

馬の脚に劣らない逸物が附け馬である。

引馬で大門を出る飛んだ客 古句

道草を喰ふを附馬油斷せず 同

十二分歡をつくして馬を曳き やよひ

付馬が聞かされてゐるのはのろけなり 風來子

彌次馬

又野次馬とも書く。

盛り場の火事彌次馬の騎馬も出る 桃水

野次馬の洒落に巡査は行詰り 五葉

下馬評

これなども言葉の轉化の一例

下馬評の主はカメラへ笑つてる 芳郎

桂馬

將棋の桂馬のあの飛び方と威力を見よ。

二階借桂馬の如く待機する 路生

馬鹿

馬を鹿と云ふ故事は餘りに有名だ、

妾が云へば馬になる鹿 古句

意馬心猿

こんな熟語も狂句になる。

淺草に意馬心猿の道と町 古句

即ち馬道と猿若町謂ひ換へれば、遊蕩のシンボルである。吉原への馬道とお芝居の猿若町である。

犬馬の勞

牛にあらずして犬と馬に結びつけたところが面白い。

薄給に犬馬の勞を誓はされ 東狂子

馬が合ふ

何故馬が合ふと云ふか知らぬが、

誘導としらずに馬を合せてた 喜由

馬力

蠟燭から燭光が生れ、馬から馬力が生れた。

一と馬力出さうと木影捨てゝ立ち 文芳

（完）

寫眞說明 （1）は川維堺支部の幹事村上角堂氏、氏は傷痍軍人である。堺支部が常に軍事に關する兼題を課してゐることもうなづけやう。（2）は日露戰役に參加した颯爽たる角堂氏の馬上の姿である。明治時代の騎兵の華やかな肋骨も今は懷しいものの一つである。

新妻は浴衣を着てもかしこまり
病人を材料と見た態度にし
病人のくせにと鼻であしらはれ
小間使鍵の穴から先づのぞき
泊る氣で來たが此家の世帶振り
寢相をば毛布に殘し起きてくる
毛布ごと吾子を抱いて醫者へ行き
感情を盛るネクタイは色も濃く
悲しくも見合になれたお嬢さん
超然と噂の中に脂切り
靴下を表皮の如く脱ぎ棄てる
移轉して來たその日から蓄音機
十二月交通巡査に叱られる
二階でも借つてと女本氣なり
轉落の石の姿で無常來る
逃げて來た朝を佗しく生卵
赤い灯に頭いささか禿げ給ひ
長襦袢太きに過ぎて悲しけれ
豪放な悪筆を書く人であり
食ふための小說なれば是非もなし
蚤取りの手付も自慢の一つにて
買ふ方が安いと思ふ染直し
幕開いてしばし舞臺は虫の聲
買うて來る迄は鳴いて、たキリギリス
新任の院長下足でおこられる
お見舞にゆけば二號と飲んでゐる
スフ入りもやはり月賦の御厄介
エキストラ芝居しすぎて叱られる
閑地利用下肥と聞き逃げ給ひ
二年生理想を問へば自爆なり
一徹は天氣豫報に目も呉れず

柳界展望

川柳の協ジーベ

寫眞は岡崎子爵二氏（一四頁飛燕往來記事參照）

催

▼本社句會は七日午後六時御津八幡宮に於て開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は一日・廿一日開講▼有恒倶樂部川柳講座は十二・廿六兩日尙廿六日は飛鳥方面に吟行▼阪大川柳會は十七日午後四時▼警察病院川柳會は十九日午後四時半▼川雜尼崎支部句會は廿二日午後六時尼崎昭和荘で開催▼川雜堺支部句會は二月廿六日午後七時角堂居に於て開催▼西日本鐵道人川柳大會は三月十四日廣島鐵道倶樂部に於て開催盛況を極めた路郎主幹出席講演▼津山支部創立句會は十五日開催、路郎主幹出席▼奥野其奥追悼川柳會は十五日午後二時葉光居で開催▼一經社川柳大會（大連）は三月六日開催▼臺中川柳會では三月一日大東亞戰戰捷祝賀句會を開催

消息

▼森東魚氏（北京）は時事吟抄「霧壓火」を印刷配布された▼朝鮮協會仁川支部では二月廿二・三の兩日仁川作家書畫展を仁川公會堂に於て開催國防獻金に供せられた▼小林文月氏（不朽洞會員）は此程所內榮轉され多忙の由「自轉車の前輪がゆらぐ氣持にて」の句を寄せられた▼寺井鋭々氏（不朽洞會員）は三月一日有恒倶樂部スキー部の一行として赤倉方面を旅行三日來信▼安川久留美氏（金澤）は二月上旬小田原より歸澤された▼市場沒食子氏（不朽洞會員）は昨月大阪遞信病院（轉勤、院內第一回の句會を開かれた▼臺中川柳會では定期句會を毎月二日・廿六日と決定された▼安藤博氏（朝鮮）は二月二十五日簽山へ轉勤▼福井哲氏（大阪）は十四日より大阪朝日會館に於て連日四日間に亘り催された全日本寫眞聯盟大阪府支部展に入賞特選の榮を被れた、作品は「放牧」▼宮岡白峯氏より來信益々奮鬪されてゐる由一層の健在を祈る▼高田抱逸氏（不朽洞會員）は川雜三池染料支部のために不盡の努力を拂つて居られる益々の發展を希ふ▼水谷鮎美氏（不朽洞會員）田邊由布氏（芦屋）長谷川三司氏（尼崎）有馬より來信「湯の色をかたる三つの顔が浮き出布」「溫泉の福神は男だけのもの三司」「淵へゆく道螢へ立ちどまり鮎美」▼橋本絲雨氏（不朽洞會員）夫妻は西日本鐵道人川柳大會（廣島）に出席の途中錦帶橋へ立ち寄られた由

慶弔

▼大西光陽氏（大阪）は二月初旬華燭の典を擧げられた▼小林稜舍氏（不朽洞會員）は三月九日永眠された驟みて悼む▼原田獨親氏（布施）の令息が二月二十一日逝去された哀悼の意を表する

▼恩賀紀川氏の長男博君が二月八日に亡くなられた。その後紀川氏が机の整理をされてゐたら、いつの間につくつたのか「ポスターの煙突なゝめに書いてあり」といふ句が出て來たそうである。少年作家のため謹んで悼む。

轉居

▼藤井阡淵氏（大阪）は住吉區昭和町中二丁目四〇番地へ▼地名改稱、奥村丹路氏（不朽洞會員）は尼崎市武庫庄字武庫之荘四丁目四十三番地▼水谷鮎美氏（不朽洞會員）は尼崎市西宇口開一八一

改號

▼田島破蕾氏（和歌山）は筆名を濱野二堂丸とされた

★社の回覽板

▼神津支部（大阪）が新設された幹事は武部香林坊氏、津山支部（津山）が新たに設けられた幹事は河田一將氏、兩支部の發展を祈る▼河田一將氏（久米雄氏紹介）井上湧三氏八竹正柳氏（葭乃女史紹介）が不朽洞會に入會された。

× × × ×

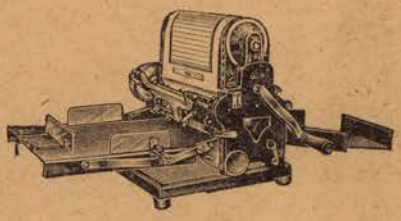
四月句會

★4日（土）

★四月四日（土曜日）午後六時
★會場　御津八幡宮（電南八六四〇）
南區八幡町佐野屋橋筋角
★兼題　「上京」　麻生路郎選
「借家」　北川春巢選
★講演　「句會雜感」　麻生路郎
主催　川柳雜誌社

堀井輪轉謄寫機

妙速細纖



大阪市東區平野町二

伊藤喜商店（型錄贈呈）

電話北濱（23）〇三二四番
九州支店　福岡市上西町

募集句 一路集

「剣道」 可宵選

剣道の型で弟犬を追ひ　照二
横面を打たれ剣道止す氣なり　小城子
長刀の昔へ戻る女學生　一聲
そら打てと剣道教師は胴をあけ　呆瓢
剣道の極意捨身があるばかり　香桐
剣道具埃にまみれ病んでゐる　敏郎
剣道場供へし花の一つ搖れ　吐空
お面をとられた聲はうしろなり　綠葉
木刀を納めて朝のニュース聽く　千斗
面胴と銃後の初老汗を知り　障子
斯うやつて斬つたと竹刀かまへられ　海朗
竹刀たこあつて本職米屋也　詩朗
剣道の來賓席に柔道家　笛六
六段を倒し雇員に引拔かれ　抱一
竹刀だこ今日は非番の鍬をとり　三昧
竹刀の冴えを審判は見逃さず　世志一
剣道部歸りはすぐに打ち解ける　浪二
台覽の剣道しづかな息づかひ　葉光
面とれば白髪を傳ふる汗の玉　榮城
栗の木を折る剣道の構へなり　太郎
剣道具二月の風へ生きてゐる　笑風
面とれば悪眼涼し武德殿　不二
面とれば恩師の白髪目立つなり　九天
勝敗は問はず剣道膽を練り　臥牛
黒胴が床しく光る剛の剣　一將
寒稽古御奉公です勵みます　八重
剣道も教へ優しく宣撫班　富美夫
趣味のない社長剣道二段なり　小宰相
本試合戰陣訓を胸にきき　勇治郎
剣道が役立ち待機姿勢なり　同
剣道で鍛へた腕で召されゆく　カズヱ
剣道の強い養子が無口なり　同
剣道の道具師走の町で買ひ　同
日本に剣道がある捷ちいくさ　波人
先生の面へ竹刀伸びきらず　同
剣道にいさゝか自信ある袴　同
(佳)道場の朝を破つた竹刀の音　昌男
(同)剣道衣眞綿のチョッキ脱ぎてゐる　九天
(同)豆剣士稽古着の儘で茶をはこび　蜂郎
(同)剣道に行かうと素足で誘ひに來　春童
(同)腺病質の子ある日剣道入門書讀む　六龍子
(人)剣道を生れかはつた氣で習ひ　カズヱ
(地)竹刀胼胝ある掌に酒を酌ぎこぼし　千斗
(天)なぎなたが使へ姑にさからはず　はるを

同窓　鋭々選

同窓の殊勳を三度讀んで見る　一聲
同窓で圍む殊勳の傷痍章　香桐
古領地同窓だつた記者が來る　波人
同窓へダバオ生存者の一報　蝶人
喧嘩した相手も來てる同窓會　春童
同窓だよと他人の事を威張つてゐ　呆瓢
同窓會出世したのが發起人　吾平
同窓として親友の荒い口　青々子
同窓の秀才だけが先へ逝き　敏郎
同窓會恩師の白髪ふえてゐる　綠葉
同窓會昔の樂書未だ殘り　晩成
同窓へ保險すゝめる聲になり　小城子
同窓會三人の母の顏で來る　吐空
同窓生もう折鞄持ち歩き　笛六

新発賣

今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は多年エキホス製造に於ける豊富なる經驗と其の途の專門家の指導に基き專らその藥効竟に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末湯布藥なり

特徴
一、本劑は微細な粉末ですから携帶に便利で用に臨んで必要量だけ使へますので經濟的で家庭向として最適です
一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして差支へありません

主治効能　感冒、肺炎、肋膜炎、氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎、ロイマチス、神經痛、打撲痛、捻挫

販賣元　株式會社 武田長兵衛商店
製造發賣元　株式會社 塩野義商店
二巴合名會社 大阪市東區道修町

包裝　一〇〇瓦　二五〇瓦　五〇〇瓦　三瓩

消炎鎮痛濕布藥（エキホス姉妹品）

エキホス粉末

C-PEJ8

掛取りに行けば同窓顔を出し　詩朗　一舟
あだ名だけ知る同窓にふと出遇ひ　清富
交際は唯同窓といふ程度　抱逸
同窓のかくも變つた暮し向き　同
同窓會通知付箋で戻つて來　駒志希
同窓の友は妹をやるといふ　同
肩書の名刺出し合ふ同窓會　葉光
同窓の桁にはづれた立志傳　同
同窓は皆平凡な父となり　吐空
(人)同窓と公孫樹の高さ振返り　浩
(地)同窓生昔の癖もあつてよし　昌男
(天)同窓會一語一句が懐しい　銳々
(軸)金權と爵位同窓捨てゝ飲み

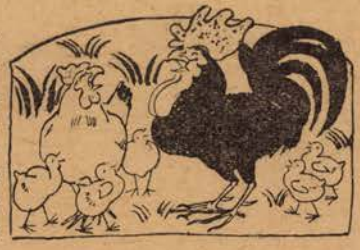
選後評

「同窓」は平易なやうで却つて難しいのか佳句が少かつた。大臣、保險勸誘、無心等の題材が多く、之等は同巧異曲の低調平凡で、表現に特に新鮮味のあるものもなく殆んど其の採擇の勇氣を持てなかつた。保險を取入れたもので、僅かに小塚子君の一句だけが、採り得られたのみである。一般にもつと廣く素材を把捉し、描寫を深くすることに努力して欲しいと思ふ。

「人」の句は淡々たる表現を以て、母校を眼前にしての追憶の態度と四邊の風物を感じさせてゐる。只だ聊か人物の姿がはつきり現はれて來ないのが缺點である。

「地」の句は懐舊の情も親密な感も、相當よく盛込まれてゐる。先づ達者な句と云へよう。

「天」の句は一語一句といふたつた漢字四文字だけで同窓會の雰圍氣が、十分感受される。表現が簡明で少しの無駄がなく、而かも含蓄を多く持つてゐる。



七號室雜記（へんしうしつから）

▼世界を震撼させてゐる大戰時下とは迚も思へないほどの麗らかな春光が街の編輯室へ射し込む。

▼「春宵雜談」は魔遊で知られた豆秋氏と脱俗的な葭乃とが、不朽洞での棚談である。どつかに間が抜けてゐて、各自が勝手に喋べつてゐるやうであるが、それで味のある對話になつてゐるのも面白い。

▼三月の句會で作句した川柳寫眞の課題は「放牧」で阿蘇の草千里だつた。その一等當選者は上田翠光氏である。

▼三月十四日午後六時に、廣織倶樂部で開かれる、西日本鐵道人川柳大會へ招かれ久しぶりに旅へ出ることになつた。午前九時五十分大阪驛を發つた。車中は阿萬萬的氏に何かと面倒を見てもらつた。四時ごろ廣島へついた。幹事の濱田久米雄氏、先着の植山九天氏（長崎）岡田某人氏（神戸）等の出迎をうけて廣織倶樂部へ出かけた。まだ開會までに少し時間があるので廣島ホテルへトランクを放り込みに出かけた。會の狀況や句報は何れ次號で發表するが、東は京都（柳太氏）、西は長崎（九天氏）、南は松山（五健氏、赫堂氏）、なほ下關方面（市多樓氏、半休氏、鯛好坊氏等）から多數の出席があり、大阪からは春巢氏橋本綠雨氏は一家を擧げて參加、これに地元の人達を加えた賑にうれしい集りであつた。久しぶりに柳石氏俗菩薩氏、士濃夫氏、露斗氏等にも逢へた。翌十五日午前十時に某人氏と共に廣島を辭し、川雜津山支部創立句會へ出席のため津山市へ出かけることになつた。途中、岡山驛で車窓へ遥見灯竿氏が顔を見せられたが僅た停車時間で多くを語り得なかつた。岡山でも歡迎句會の準備をされつゝあつたそうであるが、幹事九坡氏の親喪に不幸があり、中止のやむなき狀態となつたとのこと、あとで知つて好意を謝した。

▼津山の支部創立句會は盛會だつた。幹事河田一將氏の勞を多としてゐる。（會報次號發表）。その夜は森安旅館に一泊。翌日は白鳳氏、富山氏二將氏、蛙柳氏等の案内で、院之庄の作樂神社へ參拜、社の雅帖に

人と櫻見島鳴以後のこと

といふ創吟を遺した。そうでないかも知れないが、そう感じたまゝを句にしたのである。午後津山の街の案内をうけた。津山は靜かないゝ街だつた。こゝで多くの同志を得たことを心からよろこんでゐる。

▼本號は私が一寸旅へ出たので、ぬきさしならぬ運刊となつた。二三日留守をしたのをとりもどすために、いゝ加減な編輯をしてお茶を濁すことの出來ない私の性格のあらはれだと思つておゆるし願ひたい。

（路郎生）

扁桃腺炎
感冒
中耳炎

化膿性疾患の
内服短期療法

扁桃腺炎、中耳炎、流行性感冒、丹毒、面疔、淋疾…その他化膿症に對し、アルバジルは内服により、直接その病原菌を克服、短期間に治療を促進し……

一、發熱、疼痛、分泌物の消退
一、再發の防止……等の目的を達成せしめ得る！

殊に、品質優秀にして副作用少き点＝使用の安全性＝は本劑の大なる長所である！

包裝・二十錠
五十錢・百錢

アルバジル錠

發賣元　山之内藥品商會　東京・大阪

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社三月例會

三月七日　於　御津八幡宮

我社では三月七日戰捷第一次祝賀句會を三津八幡宮に於て開催した。一同國民儀禮を行ひ、慶祝の意を表した。當夜の講演は路郎師と白面人氏である。白面人氏の講演内容は時宜に適し、時局に關係ある著名人物及地名、軍艦名などを支那新聞紙上では如何なる字や以つて表してゐるかを説明された。戰線地區の移動は語學の流行を左右してゐる今日まことに興趣ある演題であつた。次に路郎師は九軍神の榮譽ある功勞に緒を發し、その郷里を詳かにし、郡會人の小器用さと地方人の粘り强さを比較された。川柳も小器用な作家は稍ともすると、脆くも中絶するものが多い。結局、鈍であつても牛の歩みの如く粘り强い精神力が作句の上にも必要である。大成する作家には後者に屬する者が多いやうであると我等の作句態度を誡められた。講演中にも路郎師はハワイ在住同胞を氣づかひ最近までの新聞によつて彼の地の情報を發表された。前月句會の寫眞川柳當選者は清水白柳子氏であつた。當夜は「放牧」と題し阿蘇の草千里の風景寫眞によつて作句した。（幹事記）

出席者（順不同）

路郎・鮎美・由布・翠光・斗淵・孤篷・綠葉・行春・翠芳・治男・綠雨・美奈子・不二・三司・紫香・默平・香林坊・波夢造・寄興史・千斗・豆秋・彌生・恒明・水客・栞・小雅子・文雄・平行・九一・萬的・白面人・吐空・桂風・弘・流舟・霞乃・アート

兼題「駈足」　路郎選

駈け足で　來た字が　用を忘れてゐ　萬的
駈け足に　よせよビールの　話など　害興史
駈足は馬糞の湯氣へ　ちと亂れ　不二
駈足の　後は　歩く　二　三　人　白面人
駈足へ　ちんばの犬が　ついてくる　豆秋
駈足の　一番先が　歸還兵　小雅子
駈足の橋を渡つた　音になり　波夢造
驛見える　辻で駈足　とまるなり　紫香
掛け聲の　ほどは駈足　走つてず　白面人
駈足の　オカッパへ　岡風强し　吐空

兼題「降伏」　豆秋選

叶はじと兼て用意の　旗を出し　翠光
名譽ある降伏など　髭を剃り　香林坊
降伏をしたぞと戰友の骨に　告げ　紀川
お化粧もして降伏の列に入り　綠雨
投降兵ある日は蛋をとつてゐる　九一
降伏をすると贅澤ばかり云ひ　白面人
明日邊り降伏と云ふ彈丸の音　默平
降伏の姿笑ひ〳〵みる　栞
眼の色が變る降伏とはなりぬ　鮎美
手をあげた十萬あつけない姿　斗淵
降伏の顔のまるさに呆れたり　紫香
朗かな顔で降伏してしまひ　豆秋
白い旗シンガポールの日が沒す

兼題「世話好き」　互選

世話好きは驢も上手について去に　萬的
世話好きへ隣は猫が生れそう　香林坊
世話好きの前置永く話する　九一
くすり瓶ふところにして世話を　豆秋
世話好きの額に深い皺があり　九一
陰悪な空氣世話好き知つてゐる　萬的
世話好きは名刺をたんと持つて　豆秋
世話好きに金がないのが惜しが　行春
役得もなく世話好きが立替る　綠葉
灯の消えたまゝ世話好きは談す　鮎美
世話好きが又東京へ出かけたり　豆秋
世話好きの今日は國民服で來る　白面人
世話好きと云はれ子供に緣がなし　水客

兼題「ゴム」　紫香選

ゴム靴は郊外からの泥を見せ　不二
滿月のゴムの林に大和魂　鮎美
ゴムの樹に敵の彈痕ばかりなり　九一
ゴム林拔けて斥候歸つて來　翠光
ゴム園の中から捕虜になりに出る　白面人
消ゴムをまるく小さく女教員　栞
ゴムまりをだいて興亞の子が歸る　翠光
ゴム消へ病後の力使ふなり　水客
石垣へゴムまりはずむ冬のほれ　吐空
榮轉の机のゴムがよく消へる　鮎美
消しゴムの意外な處へ轉げて居　波夢造
ゴム林慌てゝ逃げた跡があり　翠光
ゴムの樹へ部隊通過の紙を貼り　九一
ゴム風船だん〳〵眞面目な顔に　水客
ゴム靴を履いて出かける水見舞　白面人
消しゴムの技術家らしい靴でへり　紫香

兼題「芝生」　栞選

兒にごみを拾はし芝生腰をあげ　默平
入れられぬ意見芝生へころり寢る　不二
いゝ芝生女同志の飯にする　紫香
寢轉んだ芝生に雲の走るなり　桂風
朝露に濡れてる芝生犬と來る　恒明
春がくる力を芝生じつと持ち　水客
水たまり出來た芝生の昭南島　斗淵
滑り臺置いて芝生は陽炎へる　孤篷
荒鷲のある日芝生へ寢轉がり　千斗
空想にくずれて芝生やゝ寒むし　鮎美
看護婦と亀ふ芝生へちぎれ雲　吐空
寢轉べば芝生は春の暖か味　不二
大根だ芋だこゝは芝生であつた　孤篷
寢ころんで見たい芝生に札が立ち　白面人
陽溜りの芝生男の眼をつむり　水客
芝生また去年の色になつて春　由布
病室の外で芝生は崩えてゐる　白面人
コンサイス伏せた芝生へ蝶の飛ぶ　吐空
詩人に非ずルンペン芝生に居　栞

兼題「神經」　綠雨選

神經をつまんで接靡よく笑ひ　鮎美
別荘で神經質な子を育て　水客
神經が五十錢紙幣たゝみかへ　波夢造
神經質な男は隅へ坐りに來　萬的
神經の網にかゝつたちり一つ　翠光
とんがつた神經看護婦笑ひのげ　害興史
神經を病んで聞いてる二時三時　默平
盜難を聞いてその晩二度も起き　白面人
チャーチルの神經哀れとも思う　美奈子
神經ですと博士とり合はず　栞

雜川 松山支部句會（松山）

陷落記賀の夜
二月十八日　於耕一路報

難攻不落とは米英の言葉なる　五樓
洗面器白々光り留守の家　耕一路
人柱となる戰友を伏し拜み　五樓
今日からは昭南島になつた旗　蓮生
眞ッ白にこゝの蝋の洗面器　五健
生きてゐた證據に泣ける軍事便　綠風
敵前渡河讓信に似た部隊長　五樓
爆擊を喰ふ星港の熱帶魚　五健
洗面器一年生に大き過ぎ　蓮生
退院をして洗面器一つ增へ　綠風
この强さ不可知不可量シ港落つ　耕一路
よく生きて居たと抱き合ふ占領地　五健
シ港陷落東郷切手乃木切手　耕一路
洗面器朝の氣分の水溢れ　五健
炙あとを笑ふ渡河隊餘裕あり　五健

雜川 梅田支部句會

一月十九日　於吐空居

初詣り天下晴れての二人連れ　紀川
初詣り國旗ばかりの街をゆき　吐空
初詣り二號いゝとこ見つけられ　綠葉
燃えあがる頃見計ふ消火彈　鮎美
消火彈バケツに先を制せられ　治男
泥棒の指スッポンにかみ切られ　紀川
泥棒のくせに國民服など着　三司
泥棒も野次の仲間になつてゆき　綠葉
資難のあと風音にハット目ざめ　廬光
見學でみた夕刊が今屆き　治男
夕刊を女房樣のまゝで出し　三司
電車みな夕刊を讀む大戰果　吐空
夕刊を讀んでる肩へ子が躍り　紀川
故郷からのみかん四角になつて出。　同
店先きは密柑ばかりの果實屋　吐空
ころがる密柑の方角が皆違ひ　鮎美
みかんだけ喰うて噛つて客は去に　三司
ぬく〳〵と日向ぼつこの密柑畑　廬光
新婚のスリッパ甘くぬいでありスリッパも重たく見へる病上り　三郎
スリッパで立つ將軍に海が見へ　三司
スリッパをもとのまんまにぬいで出る　鮎美
木枯を聞いてる風呂の暖かさ　治男
木枯に誰が切戸を閉め忘れ　綠葉
すぼらをば着物の肩のふけで知れ　三司
すぼら者最後の奉公動めあげ　廬光
神棚へすぼらな父も手を合せ　榮坊
野戰料理妻に教へてゐる笑顔　鮎美
傍意期笑顔を一つ見せずして　一男
苦學する夕刊賣りと聞いて買ひ　阿佐緒
夕刊へやさしい言葉をかけてやり　新人
いも御飯そこへ夕刊投げこまれ　順之介
父上へ先づ夕刊を持つて行き　清子
夕刊の紙半枚に包まれず　阿佐緒
番傘の屋號へ偲ぶ父の顔　治一
ゴーストップ傘の●だけふと氣付き　秀峯
借り傘へ奈良はしづかに昏れゆき　斗風
番傘に屋號を入れてよくはやり　同
　　新人

雜川 下關支部句會（下關）

二月七日　於市多樓居　半休報

よろづ代へ尙限りなき紀元節　苦笑
建國祭迄の馬來は壽命なり　遇蓮坊
建國祭すつかり富士が晴れて見へ　市多樓
戰鬪機建國祭の地をはなれ　半休
丸刈になつて誓つた紀元節　同
建國祭皆それ〴〵の覺悟して　穗波
建國の昔のまゝの雪が降り　鯛好坊
見學の良いとこ二ッ三ッ記帳　余志雄
見學のしんがり說明聞きそびれ　同
見學にいゝ先輩のある母校　不川
人生の裏を見に來る裁判所　米三
科學する子を見學の伴に入れ　九呂平
祖父たちが見事！〳〵とほめる梅　光輝
梅干も動員される上天氣　鯛好坊
冬枯をよそに梅だけ咲いた庭　三岳
梅咲いた家は島へみんな留守　不川
お代りのお茶を賴んで梅を見る　九呂平
屋敷跡梅の木だけが殘つて居　苦笑
梅干をつゝいて風邪と長期戰　半休
梅の木を目標とする配達夫　潮流
訓練にラッパの音もよく響き　薫風
痩馬に力が這入る訓練日　潮流
訓練の樣な積りで敵を呑み　米三
訓練も地で行く時機となつて來た　米三
訓練で捨てた命を惜む友　三岳
訓練を二階から見る女事務　米三
訓練日モンペのまゝで飯をたき　市多樓
訓練のモンペの母を見失ひ　光輝
訓練の屋根逆水を打ち込まれ　不川
占領の嬉しさ迄の苦を語り　米三
占領へ兄の安否が氣づかわれ　半休
占領の聲高々と子が躍る　潮流
椰子よりも高く占領の旗を揭げ　望月坊
占領の文字だけ讀める子が覗き　九呂平
占領地あとへ宣撫の手が延びる　あきら
帝國の戰果は地圖に色彩られ　穗波
激戰のあとしのばるゝ忠靈塔　あきら
占領し名を大東亞海と改める　莞治
占領をしたとこ裸で住めるとこ　市多樓
占領の文字老眼をくもらせる　九呂平
占領へずらり荒鷲休んでゐ　市多樓

雜川 三池染料支部句會（大牟田）

二月十八日　於早鐘講堂　蝶人報

猫の夢鼠が逃げたとこで覺め　藤樓
生んだ子の置場親猫考へる　世志一
配給へ猫は自活の鼠捕る　天風
猶る氣の猫は市場の隅に置き　龜水
たべる迄待てゐ小猫がつきまとひ　抱邊
猫の尾を踏んで訪問客慌て　天風
滿足た寢顏へ母はそつと立ち　美弘
滿足は未だ〳〵早い情報部　梅春
滿足な笑ひ微かな息の下　路村
兵役のない父親に男の子　平人
豪語したシンガポールも淡い夢　天風
シンガポール敵も日章旗を見上げ　波人
百年の牙城わけなく吹き飛ばし　抱邊
幾千代も歷史に殘る十五日　藤樓
シンガポールへ移民の希望を燃ら　草兵
シンガポール落つ感激に母とゐる　波人
陷落の星港へ注ぐ世界の眼　抱邊
昭南島もう空襲はゆるされぬ　同
献金を表彰された夜業の灯　波人
電髮の費用献金して欲しい　藤樓
献金で知つた女房の好い氣前　八田
奉戴日いつも献金するときめ　龜水
献金をする氣映畵も我慢する　一葉
献金へもつたいなくも感謝狀　草兵
ボーナスの歸り恤兵部に廻り　同
五萬圓勝つて勝ちぬく氣で捧げ　抱邊

雜川 仁多支部句會（島根縣）

一聲報

俄か雨恰度ニュースの家をかり　早苗
やりくりも思案の末にいゝ度胸　清子
冗談を云はぬ無口が氣にかゝり　白鳥
狙打ち雨がはつきりして吳れず　一聲
重壕に男同志の誓ひする　同
御先祖の尊さ債券買ふ生活　早苗
故郷の都市計劃に橋が出來　同
案内者一通り話して次を待ち　雅舟
戰友の最期の顯ひしかと聞く　琴聲
表彰の額を殘して轉業す　快哉

雜川

松江支部句會（松江）

シンガポール陷落祝賀

二月十七日　於　惠福亭　將雄報

陸海軍へ感謝の句

ハワイ攻撃英米の夢吹き飛ばし　祥月
魚雷一發御見舞申すハワイ戰　同
潜水艦敵の策戰みんな知り　同
世界史を次々變へる日章旗　龍人
日の丸へインドネシヤの嬉し泣き　將雄
牡丹雪舞ひ落つる如落下傘　同
君が代に生れて今日の祝酒　榮兒
酔ふ程に第一戰を忍ぶなり　同
起てば勝つ神代ながらのかんがしの　莞路
倖せは戰ふごとの勝いくさ　同

二月五日　於　祥月居

釘をはき出して大工ざん茶をよばれ　將雄
緒戰先づハワイへ打つた五寸釘　同
大東亞海海水浴に來いと云ふ　祥月
東亞海神風吹かぬところ無く　莞路
奉戴日　煙突變り無い煙り　町紅
勝つ丈けの自信は出來た奉戴日　祥月
獨身だ一番乘りをやる決意　十詩
廣けゆく南の海を待つ漁村　龍人
漁村眞下に見えて峠の茶屋なり　將雄
代々の過去帳を持ち農村出　町紅
農村の子なり大陸希望する　遐兒
一と旗を遂に上げずに農する　同
劍道の達人の眼だるまの眼　榮兒
切符制こゝにも一つ印が要り　かほる
艦隊の一列堂々大威力　香山
スピーカの聲に氣がつく列になり　茶目坊
週間が濟んで一列亂れて來　翠芳
約束をして一列の中に入り　かほる
一列は横町の角をまだ曲り　夢想
一列は無言のまゝでやつと買ひ　綠雨
一列へ母交替に來てくれる　同
一列へ見なれぬ顔を振り返り　美奈子
賣り切れて一列力なく崩れ　芦穂
一列を近所の店が怒つて來　朗舟

雜川

小郡支部句會（山口縣）

二月二十四日　於　鐵道倶樂部　井蛙報

應召の挨拶顔に筋が入り　曉霧
挨拶は目でしてニュース聽きにゐる　井蛙
挨拶を一度にさせた發車ベル　市多樓
腹八合食べて貯蓄だ突擊だ　喜樂
此の俺の腹一つだと反りかへり　昭宏
短所とも知りつゝ腹を抑えかね　井蛙
貧乏な世帶へ子等の出來がよし　半休
ともかくも貧乏世帶切りまわし　凡骨
慰問品露營大きな輪を作り　半休
露營した時の話へ子を集め　市多樓
彈道は高し露營は夢にある　鯛好坊
煙突のところを雪はよけて降り　多吾作
スキーヤーの目を喜ばす雪が降り　游記
雪知らぬ國日本の國に出來　市多樓
青春の吐息讀書の趣味もなく　香林坊
體操をすまして職場活氣づき　林笑
サイレンに職場の音はぱたと止み　乾
職場から笑つて征つたのが還り　風情
顔馴染臺所から聲を掛け　湖心
一生を庖丁と暮す臺所　風情
飼猫もたのしみのない臺所　若榮女

阪大川柳會（大阪）

二月十七日　利生報

喰ひ逃げの逃げおくれたほどゞまされる　柳秀
鬼こつこ逃げおくれたほど大家の子　正甫
芋蔓に足をとられて逃げ後れ　利生
逃げおくれ一層氣樂な俘虜となり　同
白旗の用意もしてる逃げ後れ　春巢
逃げ遲れ今は配所の月を賞め　楠水
敵地から飛車ひき戻す逃げおくれ　榮
逃げる暇もない連擊は俘虜は云ふ　筑川
逃げおくれケガの功名樹てるなり　榮
ほめられて獨學ですと謙遜す　同
專檢をとるが獨學理想なり　春巢
成功の彼岸は遠し講義錄　利生
あんな事がを獨學やつてのけ　方正
成功は人にたよらず本をよみ　柳秀
獨學へ隣の娘のぞき込み　一彌
獨學に氣骨の勝つた縱の巖　青一路
講義錄巡査になつて二階借り　利生
獨學は古本屋にも見込まれる　春巢
皿洗ひまでしましたドクトルサイエンス　利生
講義錄母は百姓やれといひ　同
獨學の愛惜をかぬ本があり　榮
獨學の戀にはうとい顔であり　同
强情なとこも獨學はめられる　春巢
獨學は昔のことゝ子は思ひ　利生
獨學の支那語苦力をうなづかせ　春巢
辭書ばかり積んで獨學病みつゞけ　柳秀
獨學の博士三面記事となり　利生
獨學でよいかと母は念を押し　柳秀
獨學はひとの知らない氣を使ひ　方正
獨學でよいと議員が自慢れる　同
獨學がならず闘士の群に入り　利生
獨學を訓示の端ににほはせる　青一路
獨學を何んとかしたい人の出來　柳秀
小學が母校となつた立志傳　青一路
獨學の一生とれぬ國訛り　榮
又ここで行きあたつてる獨習書　路郎
獨學の今日も古本屋をのぞき　同
獨學の未だ無妻で押しとほし　同
獨學の權威先輩顔をせず　同
獨學の語學ひけめを感じて居　同
こんなこと位で獨學五年過ぎ　同
獨學のその隙筆で名を知られ　同

有恒川柳會（大阪）

二月十二日　銳々報

速達へ妻は手早く裏を見る　青美
速達も秘書の机ちや順を待ち　同
荷造りの間を速達縫うて入り　波夢造
速達で入學許可が來た騷ぎ　同
速達で馱作一篇屆く也　路郎
折角の速達花の留守につき　同
速達を出しといてから湯に浸り　同
白足袋を冷めたう履いて式に出る　波夢造
白足袋のふまれたまゝに列へ入り　青美
神主も白足袋とれば只の足　同
梅香り炭香り足袋眞つ白な　銳々
白足袋同士叮嚀な御辭儀する　同
白足袋のキリ、とスキのない妓　同
白足袋紺足袋紅足袋干して一家無事　同
白足袋をバスで踏まれたヒスリ　同
金持の後取り今日も白い足袋　同
百姓に闘れぬ氣持母が知り　波夢造
結局は郷里へ歸つて鳥がつき　同
埃吸ふてゐるかと農から手紙　銳々

雜川

四橋支部句會（大阪）

二月十七日　翠芳報

切符制昔の無駄を語り合ひ　美奉子
切符制貰へるだけは貰つとき　翠芳
切符制點數だけを見て歸り　いづみ
店半分締めて酒ふ切符制　芦穂
切符制亦組長の用が殖え　夢想

雜川

神津支部句會（大阪）

二月十八日　於　香林坊居　香林坊報

組長に推薦されてあごを撫で　生水
連續の組長ちよつと溫和すぎ　伊太古
組長を辭めて無沙汰を書き連ねね　香林坊
死石に未だ未練あり首かしぐ　嶺泉
また思案つかず出て來た淀屋橋　若榮女

蹣農、時に半に都の話する　同
蹣農して今年脚氣のカも言はず　同
百姓をする氣というて國へ立ち　同
浪華津や煙殘して蹣農する　青美
野も山も母も蹣農を迎へいれ　同
蹣農せば野菜の方が行列だ　同
蹣農しても時々町へ背廣着る　同

ぎんりん句會（松江）

二月十二日　遞兒報

常會で田植ふ迄の將棋盤　將雄
民族の誇常會美しき　快哉
常會へモンペの配る茶のかほり　小志朗
兵强しなほその上に神の風　十詩
神風は我が作戰につきまとひ　舞吉
神風へ顎紐固く引き締める　快哉
博多からハワイ神風向きを變へ　遞兒
夢でなし赤道直下ふみしめる　舞吉
赤道の便りに椰子の葉が一枚　遞兒
感激の話題又々ジャバ海戰　安彦
奉戴日あの感激を忘れまい　笑風
感激の瞼に浮ぶ眞珠灣　鶏城
連勝のあの感激で鍬を振る　紘月
感激の度に日の丸進むとこ　百合子
難攻不落又感激の旗が立ち　一聲
十二月八日伊勢から吹いた風　將雄
默禱に愛馬尾を垂れ首を垂れ　靜朗
默禱のその一分も勝ち進む　俊次郎
默禱へ勇士は松葉杖のまゝ　十詩
半轉業墨痕ほとんで胸の内　將雄
明日からは職工さんと八百屋さん　早苗
作業服脱げばお客へ愛想よく　七星
半轉業何が何でもやりぬく氣　十詩

松坂倶樂部川柳會（大阪）

二月一日　白面人報

藥學博士藥石効なく死んで行く　中村
藥瓶提げて一杯きこしめし　同
酒飲みは酒か藥ときゝ入れず　同
鼻をつくにほひで知れる道修町　恒明
ちと藥効いたか泣いてばかりゐる　同
じつとして居らず藥かみなこぼれ　同
藥にもたよりまおなひにもたより　石鹿
御禮を自筆で奥れと云ふ施藥　孤篷
お藥の樣に配給わけて飲み　生々庵
鼻藥もう切れたらしい素振り也　同
結局は廣告で効く藥也　恒明
はつきりと云はれぬ藥社長飲み　同
女社長なんぞ持藥があるらしい　同
小兒科で藥半額とは云はず　同
だまされたと思つてのめと藥奥れ　曹天
サッカリン局方として賣つて奥れ　同
藥屋で買へば蛭でも安からず　同
常會に債券買ふ人よくしやべり　中村
凍死したルンペン債券持つて居り　同
お駄賃に豆債券をもろて來る　恒明
一枚の債券ビンとはねて奥れ　同
慾だけの豆債券にあらねども　同
豆債がポケツの底に忘れられ　石鹿
成り下り債券消化に見藥を張り　同
言擧げをせず債券が賣れて行き　孤篷
防人の意氣で債券買つて見る　生々庵
振り袖を止めて債券つけてやり　同
債券にせめて銃後の俺を見せ　同
債券が當つてへそくり見付けられ　同
ボーナスが債券で來てちと足らず　曹天
本復に豆債券の内祝　同
金の要らぬ人に債券よく當り　同
兒の世界やつぱり差別承知せず　中村
ルンペンも或る日童話に涙ぐみ　同
元氣すぎましてと母が詫びに來る　恒明
託兒所の門で仕事の母を待ち　同
初孫の顔を夜汽車の夢に見る　同
十年目ですと一人子だいてゐる　同
竹トンボ僕にもあんな頃があり　同
32が6へ母ちやん面喰ひ　石鹿
遺傳ですよと子の才能に惚れて　同
作文に夫婦喧嘩をこまゝ　同
不器用がグライダー作れとせがまれて　同
切符制と知らず子供はかぎさきし　同
亞んでほりまつせと子供御注進　孤篷
ほんとうの愛を子供に教へられ　同
常會のある日子供を早く寢せ　白面人

二月十五日

法律事務所今日も書生がゐるば。　白面人
河一つへだてた事務所彼女ゐる　恒明
この家は事務所にむくとのぞか。　同
新入社事務所の隅へ坐はらされ　同
手紙をば見に來るだけの事務所也　石鹿
世界地圖貼れば俄かに事務所めき　同
事務所へも豫を一本置いておき　同
妓へは事務所の電話教へとき　同
一ト旗をあげるつもりの假事務所　同
苦學した頃の袴を出して見せ　美奈子
袴はいた養子が細く見える宵　同
へつらつてゐる身袴にしわがあり　同
グーの音も出ぬのに袴はいてくる　聖司
女房が留守で袴はそのまんま　恒明
會社ゴロ袴正してさてと云ふ　同
茶屋へ行く袴とよもや思ふまじ　石鹿
きかぬ氣を袴のヒダにつんと見せ　同
引きづつた袴どうやら酔うて居る　生々庵
年に一度妻も手傳ふ袴也　同
天理さん袴で市場目立ちすぎ　同
兄弟の喧嘩はいつも兄が負け　聖司
ねえ兄弟たゞ〳〵御酒を飲んでいく　同
戰こつこ兄のゐる子がいばる也　石鹿
嫂さんが來てから私ら放つとかれ　美奈子
出征の留守を妹ペタル踏む　石鹿
落ちぶれてゐるから兄に放つと。　恒明
御無沙汰はご互しやよと兄の酌　同
この下が居ますと公報にぎりしめ　同
南から來る郵便は乳兄弟　同
兄弟の氣質のまゝに服破れ　白面人
弟を泣かせて兄は遊びに出　同
叱られてから弟を連れてゆき　同
兄弟がみんな博士で撮される　同
薄つぺらが在所の兄の氣に入らず　生々庵
格式を愚兄家では持ちたがり　同

非特異性全免疫元
オムニン
トツメコ
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜萃）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蜂窩織、其他各科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包装）
1gr 10管入　1gr 50管入　1gr 100管入
1gr 500管入　1gr 1000管入
—文獻贈呈—
發賣元　株式會社黑田藥品商會　大阪・東京

妹が俺と歩くを嫌ひ出し　同
老眼鏡弟に貸してふと寂し　同

三月一日

プロペラの樣に喋ってつかませる　聖司
プロペラだ車輪だ科學の子と暮し　同
プロペラが止まり覺悟はきめたぞ　石鹿
プロペラに合掌してる整備兵　曹天
鐵回收リヤカーの上が頼もしい　美奈子
文化史に一線太く鐵とあぬ　石鹿
米英の艦は鐵屑なみにされ　白面人
勝つための鐵に鍋まで差出し　同
鐵瓶も御國の爲だ出しときな　曹天
先づ蠶沈あとでゆつくり引上げさ　同
回收へブリキの汽車をさげて來る　孤鋒
米のある間は行列けなしてゐ　久行
戰勝の地圖へ煙草の灰が落ち　香林坊
兄さんが寫らないかとるニュース　恒明
その涙炎火の所爲にして拭ふ　同
つぎはぎの足袋で法事へ出かけ　石鹿
算盤が合はず事務所の外に出る　白面人

警察病院川柳會（大阪）

三月十九日　正柳報

附添の腕の太さを羨みて　道朗
附添を幾人も變へ死んで行き　同
此の經過先づ附添を詰るなり　同
附添の入れ智惠睡眠藥をくれ　同
大臣候補附添になだめられ　同
孝行の出來る附添羨まれ　正朗
附添を汚れど昔は御寮さん　同
附添へ氣兼も金も使つてゐ　同
附添は給料だけを動いて　同
廻診へ附添ヒョコッと齧つて來　正柳
春風へ附添伸びをしてみたし　同
附添の母は離れて念じてゐ　湧三
附添へまだ〳〵切れぬ手紙が來　同
日の出する國の廣さを地圖にかき　青柳
應接へ地圖を掛けてる話好き　正朗
地圖あれと道は標夫に聞いて居り　同
地圖を背に首相マイクの前に立ち　同
皇軍の電擊地圖屋まこつかせ　同
地圖に無い路を辿つて行く若さ　正柳
此所もとは取る氣と地圖に線を引き　道朗
素人の用兵談義日は永し　湧三
これだけの配給ですと淋しがり　道朗
病勢は何うでも看護婦よく肥り　同
張特使兄貴の國へ禮に來る　正朗

車内隣組運動（一句）

娘さんにうつかり好意寄せられず　正柳
南方から色のワイシャツ着て歸へ　同
卒業の時のワイシャツ懷しい　柳一
ワイシャツの袖口まくつたばかりと　浩
舊友のワイシャツ破れ淋しくて　道朗
ワイシャツを脱ぐ脱ぐに兒は抱く　吉郎
日曜日だけはワイシャツ着たくな　同
ワイシャツへカウス釦が見つかる　正朗
ワイシャツで上衣の襞らぬ重需工　同
ワイシャツを縫つて貰つて緣とな　青柳
ワイシャツと書いて中味は五圓也　五郎
ワイシャツで失禮しますとりこと　道朗

有恒倶樂部川柳會（大阪）

第百回記念會

二月廿四日　於　百姓亭

一生を百圓臺の生活なり　銳々報
百圓で濟んでは見ても損は損　杜丹
大臣が育つたといふ百姓家　至藝瑠
金借るにたつた百圓とほざいたり　銳々
百萬圓の寄附がやつぱり話題也　同
百圓をやるといふのは嘘にされ　同
迷子抱く百戰の士は水を與り　青美
南國の百花にむすぶ故國の夢　同
百獸の王もひれ伏すマレー戰　同
ポケットにまだ百點の衣料あり　同
百姓で田地もあるといふ調べ　同
百目だけどうぞと貰手哀れ也　波夢造
拜むこと忘れてお百度參り見る　同
百萬遍問答無用實力だ　杜丹
百萬圓出來た頃には切符制　同
武器捨てるよな敵は百萬ありと　德二
百藥の長あと味悪いものにそろ　至藝瑠
帶中に動ありきわが五十六氏　青美
大將と云はれて八百屋刺錢をとち　同
身を落しネェ大將とあがめられ　至藝瑠
大將に母あり國に小さく居る　銳々
大將の勳章がほしい子に困り　同
兵ある日大將に直かにもの云はれ　同
馬は馬で大將の馬を羨まん　同
自爆機の報大將も合掌す　同
大將大將と矢鱈頼んでる　同
おでん屋の大將むかし株屋とか　同
記者が來て大將と知る寢臺車　青美
大將の名刺肩書刷つてない　同
大將の憂參は後でうなづかれ　波夢造
何でも名〳〵大將にと叔父は云ひ　杜丹
スキ燒のこゝからこゝはわしの分　波夢造
丁度よいとことスキ燒割り込ませ　銳々
混み入つた電話スキ燒煮えつまり　同
スキ燒を主張してゐる下僚也　同
鳥スキに大丸鬣の一ト昔　青美
スキ燒も相末すぎると云つた過去　同
スキ燒は隣の鍋が早く煮え　杜丹
鐵筋もあらはおゝわが爆彈よ　青美
鋼鐵の音聞き刷れた夜食する　銳々
熱心な奴サと少し敬遠し　同
熱心を買はれて職場長となり　同
熱心な雪の朝でもカメラ持ち　青美

石曾根民郎　川柳句集

題字　麻生路郎
序文　版畫　小林朝治
裝畫　關根準一郎

川柳句集「大空」の著者は信州の產。純情の持主。彼の句には彼獨自の個性が盛り上つて異色ある川柳を構成してゐる。彼の句は漫畫に出來ない句が多い。所謂川柳らしい川柳の境地から拔け切らぬ惱みを持つ川柳人の一讀を薦めたい。

B6版・和紙木版裝函入　定價　一圓（送賣拾錢）

發行所　堺市出島海岸通二丁目一八二　不朽洞
振替大阪三〇三九二番

社關係人の々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野嘯濱　藤村作　藤本卯之助　顕原退藏　淺田一　末弘巖太郎

客員

鳥山一歩　沖野岩三郎　大島瀧明　大谷五花村　龜井晟修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介

谷脇素文　高雄亮雄　生方敏郎　篠田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　削田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤篷　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉曹天

小畑自有浪　古川風竹　削山北海　古川麗花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤草一郎　三輪晩翠　永谷鮎美　大阪形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢遣　藤岡至藝璃　西川青美

★

姫田夕鐘　村松夢裡　市場沒食子　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　春元紀太　宮岡白蜂　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客

黒川紫香　丸尾潮花　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　大谷鮎美　田中雨月　平佐平三　櫻川不水　田中風葉　中原銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松麗　魚住蕭潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　西川愁水　中内翠芳　多田市多樓　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　逸見灯竿

植山九天　夷一笑　鈴木石鹿　矢野宵明　蔭堂　月原伯峯　高山抱逸　篠山籌彦　國弘半休　岩崎水虹　阿萬萬的　谷川綠風　小林文月　酒井美知夫　飯尾寄與史　小川恒明　野口柳太　浪玲之介　津路紅多呂　河野夜王　德永雅美　谷口綠葉　武部香林坊　上田翠光　河田一將　井上湧三　八竹正柳

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし
函館支部（函館）長修
梅田支部（大阪）鮎美
難川支部（島根）綠之助
鳥取支部（鳥取）鐵州
松山支部（松山）耕一路
天王寺支部（大阪）八九滿
鶴町支部（大阪）双虎
御池橋支部（大阪）夢裡
松江支部（松江）將雄
大幾局支部（大阪）柳太
西條支部（愛媛）英賀夫
城南支部（大阪）申仙

今治支部（今治）文庫
川雜光笑會（大阪）里十九
竹原支部（廣島）芳郎
廣島支部（廣島）久米雄
豐中支部（豐中）紫香
下關支部（下關）半休
北鮮支部（羅津府）美笑
蒙彊支部（張家口）柳路
上海支部（中華）天作
仁多支部（島根縣）一聲
神津支部（大阪）香林坊
津山支部（津山）一將

堺支部（堺）角堂
岡山支部（岡山）九坡
尼崎支部（尼崎）美知夫
日和佐支部（德島縣）賢次人
三池染料支部（大牟田）蝶影
大洲支部（愛媛縣）椋影
小郡支部（山口縣）井蛙
熊本支部（熊本）水源
仁多支部（島根縣）一聲
神津支部（大阪）香林坊
津山支部（津山）一將

募集

第十九卷 第六號課題

四月廿日締切（十句以内）

釘獨身　西田艸樂選
多田市多樓選

第十九卷 第七號課題

五月廿日締切（十句以内）

占領硯　姫田夕鐘選
長野文庫選

第十九卷 第八號課題

六月廿日締切（十句以内）

實印校長　須崎豆秋選
西尾栞選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜吟廿句）麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雅吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書簡はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號

川柳雜誌

第十九卷 第四號

毎月一回一日發行

定價
一冊（郵）金三〇錢
半ヶ年・六冊　金一圓八十錢（送料一錢）
一ヶ年・十冊　金三圓六十錢（送料十二錢）

外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ

御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。魯鈍又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十七年三月廿五日印刷
昭和十七年四月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告　本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社へ御一報下さいますやう。

發行所　川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
振替（大阪七五〇五〇）

編輯兼發行人　麻生幸二郎
東京市神田區淡路町二丁目九番地

配給元　日本出版配給株式會社

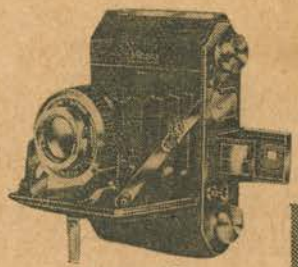
日本出版文化協會會員
號番員會壹四〇八五
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
電話土佐堀　三三三三番　八八一一六六四番

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込みされは郵税を奉仕して直接發送致します。

送本者名　住所氏名

セミ・ミノルタ

代表的國産カメラ



ブロニー
16枚撮り

II型F4.5付
¥117.00

F3.5付
¥141.00

距離計
¥21.00

（カタログ呈 要郵券十錢）

淺沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番 五八〇三番
工場用同 五八〇四番

東口 スピーサ

ワイシャツ
婦人服地
其の他

大阪市北浜二丁目 片倉ビル
電話北浜(23)六六三六番(4)

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

樹林醫學博士
片瀨醫學博士 推奨 監査

片瀨醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

SENRYU ZASSHI No・219
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年三月廿五日印刷納本・昭和十七年四月一日發行

感冒の予防と治療に

THERAPO 20 TABLETS

テラポール錠

感冒
中耳炎
扁桃腺炎
蓄膿症

各種の化膿菌、流行性感冒菌、淋菌等生体内に潜入して病源となる惡性細菌を確實に撲滅し、化膿性皮膚疾患、扁桃腺炎、感冒、中耳炎、蓄膿症、齒槽膿漏、齒齦炎、丹毒、敗血症、膀胱炎、急性慢性の淋疾等を最も短期間に治療せしむる新發見の化學療法――本邦ズルフォンアミド劑の始祖たる榮譽と卓越せる技術による最高の純度とを以て全國醫學界に信認せらるゝ第一製藥のテラポール

六錠・二〇錠・一〇〇錠

元造製
第一製藥株式會社
東京日本橋區江戸橋
大阪東區道修町

川柳雜誌 第二一九號 ㊞定價金三〇錢 送料壹錢